神理郷 ～God Pia～

羽崎 暮斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神理郷　～Ｇｏｄ　Ｐｉａ～

【Ｎコード】
Ｎ４７１７Ｘ

【作者名】
羽崎　暮斗

【あらすじ】
２７４５年、日本。
かつての『東京』を中心に、めまぐるしい発展を遂げた現日本の首都『神都（しんと）』。
科学技術も日々発展し、『優秀な人材』の『特殊な教育』に力を入れる神都。
神などというものは忘れ去られ、人々は進化を遂げた。

人と神、科学と神話の織り成すサイエンス神話ファンタジー。

当作品は、某『とある』作品に感動したウマシカな作者が、大して溢れないアイデアを見苦しく詰め込んだ作品になっております。

2次ではないです。
パロディでもないつもりです。でもパロディになってますね。えぇ。
『とある』の中の人は出ませんよ。一応ね。

『妙にリアルなファンタジー』を目指して頑張っております。
暇すぎて死んでしまいそうな人はぜひ見てね☆

邂逅　～煉獄の王妃～　（1）

「はぁ…」

と、通話状態の携帯電話を切り、迦具土凍也（かぐつちとうや）は深く小さくため息をついた。

ベッドの上であぐらをかきつつ、自室の天井をしばし見上げ、また一つため息をついた。

「……しゃーないか…」

のそっとベッドから降りると、迦具土は身支度を始めた。

鏡を見ながら寝癖で暴れる髪を直し、一部が生まれつき白くなっている前髪をいじりながらまたため息。

最近なんだか目つきが悪くなってきている顔とにらめっこしてまたまたため息。

部屋の中央にある座椅子にかけてある濃紺のズボンを取り足を通す。

何やらおぼつかない手つきでベルトを締めると、次は部屋の壁にかけてある半袖のカッターシャツに袖を通す。

因みに、迦具土は高校2年生で、現在は夏休み初日である。

いつまで寝ていても誰にも何も言われない、進学だの就職だのと焦る必要もまだ無い。そんな素敵な日々の始まりの朝に身支度を始めた訳は…

「ったく…しょうがねぇじゃんよぉ。元はと言えば、『会長』が自分の仕事を俺に押し付けたりすっから…出席日数足んなくなるんだっつの」

――――――補習である。

〜〜〜〜〜〜〜〜

「おや、迦具土。こんな朝早くからご出勤かい？」

身支度を済ませ、自室を出て、建物から出た所で不意に話しかけられる。

頭にバンダナを巻いて上下緑ジャージにフリル付きエプロン、右手に箒、左手にちりとりといった格好の若い女性だ。

「咲子さん…。知ってるくせに…。咲子さんこそ、こんな朝早くから掃除なんて、珍しい事もあるもんすね」

センスを疑わせる格好はスルーし、少々皮肉気味に会話をする。

「はっはっは、まぁがんばんな。あたしは暑いのは苦手だからね、涼しい朝のうちに仕事を済ませようと思ったのさ。というか迦具土よ…」

そこで言葉を切り、女性は迦具土の横に歩み寄り、迦具土の肩に左腕をまわす。

「今の言い草、まるであたしが仕事してないみたいじゃないか。ん？」

ギリギリギリ…と、肩にまわされた腕に力が入り、迦具土の首が圧迫される。

「あ、すんませんすんません。この寮は咲子さんのおかげで綺麗に清潔に快適に保たれております」

「そうだろそうだろ。お前らの飯だって、みぃんなあたしが作ってやってんだからな。感謝してるかこのガキンチョ」

「――――４人しか居ないけど」

「なんだってぇぇぇ？」

ギリギリギリ…ギチギチギチ…と、渾身の力が込められていく。

余計な事を言うんじゃなかった。時すでに遅しである。

「あだだだ、すんませんすんません。してます。メッチャ感謝してます。――――てか胸ぇぇぇ！」

思い出したかの様に、迦具土は叫んだ。

上手く決まっているらしく、もがいても抜け出せない。現在、迦具土の後頭部には、幸せな重みがズシリと乗っかっている。

「ん？なぁに興奮してんだい、このエロガキ」

「違う！いいから離せ！離して！離して下さい！」

やっとの思いで開放された迦具土は、自分でも赤くなっている事がわかるくらいに、顔が熱っぽかったので、慌てて女性から目を逸らす。

「はっはっは。真っ赤になっちゃってぇ。このムッツリスケベ」

「ッ――――、あんたなぁ…もっとこう…女らしくできねぇのか！」
「はんッ。なめられるのは御免だよ。それにね、あんたみたいなガキンチョに触られたって何とも思わないんだよ。そんなに触りたきゃ触ってきな」

女性は、上半身を折り、交差させた腕に、豊満に実りすぎた果実を乗せ、首をやや傾げ、斜めからの上目遣いで迦具土を見つめる。

「――――――ッ――――――逆セクハラだぁぁ！」

迦具土は堪らず走り出した。これ以上は理性とかなんとか、大事な物が吹っ飛びそうになったからだ。
その背中を、女性は大らかに笑いながら見送る。

彼女、楠木咲子（くすのきさきこ）（２５）は、迦具土が住む小さな小さな寮、『常盤寮』の現管理人である。
元は、彼女の両親が切り盛りしていたのだが、去年、主人の方が病気を患い、両親は現在、実家で静養中だ。
生徒達を追い出す訳にもいかないし、小さな寮だから一人でも大丈夫、と、彼女が管理を申し出たのだ。
寮とは言っても、どこぞの学校や企業などと提携している訳ではない。
分類としては個人経営の『下宿』なのだが、外観が小さなオフィスビルみたいなものなので、主人が名前を付けただけなのである。法に触れていないかどうかは怪しい所だが。
つまり、『常盤寮（ときわりょう）』と言う名の『下宿』なのだ。
そして彼女、楠木咲子は……美しい亜麻色のポニーテール、整った顔立ち、抜群のスタイル、爆ぬー。

そんな思春期を悩ませる問題を山積みに抱えている彼女は、近所ではかなり有名な美人なのだ。
そんな人に胸触っていけなんて上目遣いで言われようもんなら、理性なんて物は砲台に込められた砲弾の如く意図も簡単に吹っ飛ばされてしまうだろう。
迦具土も男である。揉みしだきたい衝動がなかったと言えば嘘になる。
据え膳食わぬは何とやら。がしかし、恥をかいてでも守らねばならない物はちゃんとあるのだ。
そう、人として。
「……そういやあの子、朝飯はよかったのかね？」

〜〜〜〜〜〜〜〜

「――――ったく…朝から面倒な…」
常盤寮から最寄りの駅に駆け込み、改札のＩＣ端末に携帯をかざし通り抜け、発車寸前だった電車に飛び乗った。
失敗した…と、迦具土は思う。
時刻は７時３４分。夏休みだから、学生こそいないものの、大人達は休みではない。いわゆる通勤ラッシュだ。
普段、学生達は、これより一本早い、もしくは遅い電車に乗り込む。

この時刻の電車は、大人率が異様に高いのは、この辺りではポピュラーな事なのだ。もちろん、迦具土もわかっていた。
駅のホームに着いた時に、電車のドアが閉まる時の音が聞こえ、慌てて駆け寄ったはいいが、大人がぎゅうぎゅうに詰まっているのを見て、一度は足を止めたのだ。
しかし、急に駆け寄ったもんだから、閉まろうとしていたドアが一度止まり、再び開いた。
一度止めてしまった手前、乗らないなんて事はし辛かったのだ。大人達の視線も少し痛かった。

（…おっさんに圧迫されて誰が嬉しいんだか…）

と、ドアと中年男性に挟まれ、顔をしかめながら迦具土は思う。
こんな風に他人と体が密着するなら、可愛い女の子か、綺麗なお姉さんの方がいいに決まっている。迦具土も男である以上、その考えはぬぐいきれない。
そんな事を考えても意味無いのはわかっている迦具土は、特に何を思う訳でもなく、窓から街を眺める。

―――――――――――――――

神都（しんと）。
これが現在、迦具土が生活する街の名前だ。
『街』　と言うより、『国』と言う表現の方が正しいのかもしれない。
２４世紀後半より２６世紀にかけて、目まぐるしい発展を遂げてきた、現日本の首都である。
２７４５年現在、もはや神都の機能は、『街』としての域を超越し、『国』としての性格を持ちつつあるのだ。

かつての『東京』を中心に、発展に発展を重ね、その総面積は、９，１３６?。イメージとしては、『四国』の半分とほぼ同等、という事になる。

その広大な神都は、内部を１０８つの『区』に分けられる。各区は『〇〇番区』と呼ばれ、それぞれの区ごとに、性格や管理体制は異なる。

が、一応、大まかな分類は存在する。

・１～６４番区、『行政区』
・６５～９６番区、『教学区』
・９７～１０８番区、『特殊管理高等区』

と、分類される。

『行政区』は、文字通り『行政』、国の運営を管理する区間である。

神都における、ありとあらゆる商工業や財行政を６４の区間のみで仕切っている。

その中でも、１～１２番区は、『中央統括行政区』と呼ばれ、神都、ひいては日本の行政を管理する程の高等区となっている。

『教学区』は、保育園から大学院まで、ありとあらゆる教育機関が存在する区間である。

保育園から大学院、すべての教育機関が揃う区もあれば、高等学校しかない区など、各区によって教育体制が異なっている。

神都は、『特殊な教育』に力を入れており、日々『優秀な人材の開発』が行われている。

各区の管理は、その区の最高等教育機関が受け持つ。

量販店や飲食店などももちろん存在する。しかし、その管轄は行政区ではなく、その区の最高等教育機関に任される。

『特殊管理高等区』は、行政区では行われない、『開発・研究』を主とする区間である。
表向きに公表している情報が極端に少なく、内部事情を把握している者は数少ない。

そして、これらの区は、中央統括行政区と特殊管理高等区を神都の中心に、その周りを教学区、さらにその周りを行政区が覆う様に存在している。

迦具土の事を言っておくと、彼が住む常盤寮は６０番区。全体が住宅街の様な区の、隅っこの方に肩身狭そうに建っている下宿だ。
そして現在、迦具土は６５番区にある、自身の通う学校『禊月（はらつき）学園』へ補習をしに向かっていると言う訳だ。

『禊月学園前〜、禊月学園前〜』

と、車内に人口音声の独特なアナウンスが流れる。車掌等は居ない。電車は全てモノレールの様な仕様に変わり、操縦も全てコンピューター制御。万が一に備え、駅から走行中の車両の衛星監視と、コンピューターへの干渉をしている。
そこまでするなら、車掌が居た方が良いのでは？と思わなくもない。

「……ん？…やべっ」

すっかり人が減り、座席に腰掛けてウトウトしていた迦具土は、慌てて電車から降りる。
ホームを出て、改札のＩＣ端末に携帯をかざし、駅を出る。

駅を出て、ため息をつく。
目の前には、広大で美しい広場。中央には噴水なんて洒落た物もある。
そしてその広場の先には、一見、どこぞの巨大な屋敷にしか見えない、禊月学園の校舎が堂々と佇んでいる。
しかし、その風景の中に、人は数える程しか居ない。
スーツを着た女性、背広を着た男性、恐らくは教師だ。迦具土が見知っている人も居る。
迦具土と同じく、制服に身を包んだ人も居た。

（…補習か、自業自得だな）

自分の事を棚にあげて思う。迦具土の場合は少々事情が違うのだが、同じく補習には違いない。

（……そういや朝飯…忘れてた）

寮監、楠木との無駄な絡みさえなければ、駅の売店でおにぎりか何かを買ってくる予定だったのだが、頭の中は爆乳祭りだったので忘れていた。

（今日は購買も開かんしなぁ……）

ドカッ　と、噴水横のベンチに腰をかけた。
補習開始時刻は朝のＨＲと同じく８時５０分。
それこそ売店なりで買った朝飯を教室で頬張るつもりだったのだが、前記の通りである。
最寄りのコンビニまでは徒歩で２０分かかる。
田舎とかそういう事ではなく、禊月学園の敷地内にコンビニ等の店が無く、しかも広すぎるのだ。

小中高一貫の学園で、小等部・中等部・高等部のそれぞれに校舎があり、グラウンドや体育館やプール、寮などもそれぞれ完備されている。迦具土がこの学園の寮に入っていないのは、ただ単に寮費が馬鹿高いからである。

「んや？ツッチーでないのさぁ」

コンビニまで行くのを渋り、噴水横のベンチにほされた布団の様に腰掛けていると、ふいに声をかけられる。

迦具土にとっては聞き飽きた声。

「……柴崎（しばさき）……鴻薙（こうなぎ）…」

体を動かすことは無く、首だけを正面に向ける。

声をかけて来たのは迦具土の友人、伝説の『オオサカのおばちゃん』ばりに目障りな程『紫ぃぃぃぃ』と主張する紫ヘアーをワックスで固めてツンツンにし、ホストの様にシャツをはだけ、目に掛けるわけでもないサングラスをはだけたシャツに引っ掛けて歩く、『恥部』こと『柴崎秋道（しばさきあきみち）』と、その横には、上質な絹を思わせる美しい白髪を後頭部で括っており、何を考えているのかわからない糸目に常に上がり気味な口角、柴崎とは対照的に整った服装、細すぎる体、『もやし』こと『鴻薙華川（こうなぎかせん）』の2人が近づいて来る。

「なっはっはー。ツッチーも補習かぁ？」

「……あぁ」

会話すらしんどい気分の迦具土は、生気薄く聞き流す。

「んん？いつもの毒舌はどうしたいツッチーよ」
「……黙れ喋んな俺の視界から直ちに消え失せろこのムラサキバフンウニ」
「――――っはぁ～効いたぁ～、今のは効いたわ～。朝一にムラサキバフンウニはひでぇよな、せんちゃん」
「うんうん、かわいそうなバフンウニだね」

『せんちゃん』と呼ばれた少年は、左手を顔に当て、右手で柴崎の肩を叩いた。

「ウニじゃねぇ！」
「……んじゃあ、紫色の馬糞」
「不健康だな！病院行かなきゃ！」
「……病院より先に美容院に行ってこい。腕のいい脳外科医なら後で紹介すっから」
「お、今日はやたらと頭部を攻めて来るじゃないか。破壊報酬など出ないぞぉ」

日干しされてる昆布みたくだらけてる迦具土は、もはや頭も上げずに柴崎を罵倒する。
ウルト〇マンの様なファインティングポーズをとる柴崎。
そんな2人のやりとりを、鴻薙は我が子を見守る母親の様な目で見ていた。

「毎度毎度目障りなんだよ。抜くか千切るか毟るか刈るかどれかにしろ」
「禿げる以外の選択肢はないのか？」

こんなやりとりを、何を理解したのか、頷きながら見ている鴻薙に柴崎は「何がウンウンだ！」と叱咤している。

「くそぉ、お前ら2人して紫を馬鹿にしおってぇ…！」
「いや、馬鹿にはしてねぇけど…頭に着ける色じゃねぇだろそれは」
「いいじゃんいいじゃん！何がいけねぇのさぁ！」
「……お前だけだぞ……名前に『柴』があるからって頭を紫にするやつ。言っとくけど漢字違うかんな」
「へ……？」
「……お前の『柴』は『紫色』じゃなくて『柴犬』の『柴』な」
「……」

硬直。
衝撃　（？）の事実を突きつけられた柴崎は、世界が壊れたかの様に立ち尽くす。

（こいつ…今までの人生ずっと勘違いしたままだったのか？）

『ゴーン…ゴーン…ゴーン…』

どの位この場所でだらけていたのか、朝のＨＲ前の予鈴を告げる鐘がなる。
禊月学園のチャイムは、通常の学校のチャイムとは異なり、重厚な鐘の音が響く。協会の鐘を大きくした様な物が、敷地内の中央に設置されている。名前は『鈴鐘塔（りんしょうとう）』。
「おや、もうそんな時間かい？」

せんちゃんこと鴻薙が鐘の音に反応し、腕時計を見た。その腕は『体脂肪ってナンデスカ？』と語りかけて来る。時計も、一

番締まる穴で留めてるにもかかわらず隙間がある。
迦具土は何回見ても「細っ」と思うが、口にはしない。
鴻薙は１７０後半程の背丈があるのだが、あまりの体脂肪の無さに、擬人化もやし当然である。

「遅れると面倒だ。そろそろ行こうか」
「…あぁ。おい、行くぞ柴崎」

ほけ～っと突っ立っていた柴崎は、迦具土の呼びかけにピクッと反応し、少し考えた後…

「…まぁ…似た様なもんだし？」

と、満面の笑みで言い放つ。

（そういう問題じゃねぇ）

と思ったが、めんどくさいので心にしまっておこうと決めた迦具土であった。

邂逅　～煉獄の王妃～　（１）（後書き）

改稿したら２話とも２話になってた（＾＾；；

気づかなかった間に読まれた方にはなんとお詫び申し上げればいいやら（＾＾；；

どうもすいませんでしたｍ（＿＿）ｍ

１０／２８　追記

やっと段落下げの仕方がわかった（。▽。＊）

ｉＰｈｏｎｅからだとスペース何個入れても反映されないから困ってたし（＾＾；

やっとそこそこ読みやすく書けると思いますので、よろしくお願いします（・∀・）

（2）（前書き）

長すぎる導入部から少し話が動きまっせ（。゜ω゜。）ノ

（2）

〜〜〜〜〜〜〜〜

迦具土達は何やら広い空間に居た。

この場所は『講堂館』２階、『第四講堂』。

講堂館とは、禊月学園の中心部にある鈴鐘塔から北の方角の高等部校舎を挟んで対称の位置にある施設である。

４階建てで、１つの階に講堂が２つもある。

ぶっちゃけ、禊月学園の生徒にとっては、集会や特別講師を招いての講義位でしか使う事のない施設だ。

しかし実際は、様々な検定試験や、オープンキャンパス、入試、６５番区の重役を集めての会議など、結構需要のある施設である。

「ふぁぁ…ぁ…」

迦具土は講堂内の豪華な内装には目もくれず、無機質だが高級な椅子に腰を掛け、背伸びをした後、同じく無機質だが高級な机に突っ伏した。

横に３つの椅子が並び、その前には一繋がりに横長な机、一人分程の間隔でタッチパネルの様になっており、その正面には小型のモニター、その横からは、広い講堂内に声を響かせるための細いマイクが伸びている。

そのセットが横に５つ、縦に１２程並ぶ空間の左端列、前

から6番目のセットに迦具土達は腰を掛けた。
左端に柴崎、中央に迦具土、右端に鴻薙が座っている。
「眠いのかい？僕もさ」
「……知らんがな」
返答に困る言葉を半ば欠伸をしながら掛けてくる鴻薙をあしらい、目を瞑る。
「昨日も『仕事』だったのか？」
「……まぁな」
腕を組んで突っ伏している迦具土の頭は、現在右を向いているので、後ろから聞こえる柴崎の問いに、特に向き直る事もせず応える。
「なっはっは。相変わらず大変だな『副会長』さん」
「……るせぇ」
「しっかし羨ましいぜぇ。あの麗しの『会長』様に毎日会えるなんてさぁ」
「代わりたきゃいつでも代わってやるよ」
「マジか！」
「あぁ。だからさっさと当選しろよ」
「……」
「『蓮神会役員選挙』か。次はいつ頃だったかな？」
「…12月上旬な。てか、絶対に鴻薙が出た方が可能性高ぇのに」
「僕は表舞台は嫌なのさ。アキの応援を続けるよ」
「……柴崎にお前以外の票が入った試しがあったかよ」
「……」
「ないね。それに、凍也がいるから誰も副会長にはなれないじゃな

いか」
「…会長とお近づきになればいつかは指名してもらえるかもな。でも先ずは役員の中に入んねぇと。まぁ諦めんなよ、柴崎」
「……ヤダな、励まされなくても別に泣いて…なんかない…から…」

禊月学園には、『蓮神会（れんじんかい）』という組織が存在する。
平たく言えば生徒会と同義である。
顧問教師５名、会長、副会長、書記３名、会計３名、庶務２０名と、少々規模も大きい。
しかし当然である。禊月学園は小中高一貫一（蓮神会に参加出来るのは中等部３年から）。それに、ここ６５番区の管理を任される、区内の『最高等教育機関』なのだ。それにより、校外からも依頼等が寄せられたりもする。
それを３０名弱でこなすとなると、逆に少ない位だ。
そうなると必然的にそのメンバーは優秀さが求められるし、信頼があるに越した事はない。
メンバーの大半は、教師や生徒からの推薦である事が多い。その上で、やる気があると認められた者が、晴れて役員となれるのだ。
もちろん一般からも選挙に立候補する事は出来るのだが、当選率は極端に低い。当然、柴崎の様に邪なオーラをだだ漏らしてる様な奴が当選するはずもない。
そして、柴崎が諦めきれない『副会長』の地位には、鴻薙が言う様に迦具土が居座っているのだ。これは『会長』が迦具土の『腕』を買っての直々の推薦一（本人のやる気は無視）なのだが…。

「――――チーっ。おい、ツッチー！」
「ん……なんだ」

「なんだじゃなくて。当てられてんぞ」
「…はぁ？」
小さくも強めに声をかけられ目を覚ますと、静まり返った講堂、その前方中央には少しイライラした様子でこちらを睨む補習担当教師。
何時の間にか補習が始まり、何らかの問いを投げかけられたと迦具土は理解した（誰でもわかる）。
「……何？」
鴻薙に問いかける。
柴崎は自分と同じく聞いちゃいないと判断したからだ。起こしてくれたのは柴崎だが。
「『才覚者』の定義、だよ」
「……」
それだけ聞くと、ゆっくりと立ち上がり、眠たげに頭を掻きながら、机からぴょこんと生えているマイクの電源を入れる。
「…『才覚波』を脳内でエネルギーの消費により任意に生産でき、それを自身の体内器官、通じては物体、自然現象などへ干渉させ、何らかの変化を生じさせる事が出来る者…です」
「……よろしい。話はちゃんと聞いておく様に」
わかりません的な解答を期待していたのか、何やら納得のいかない様子の教師であったが、小さめに釘を刺して着席を促す。
寝ていたので注意も兼ねて当てたのに、普通に答えてしまったので注意するタイミングを失ってしまった、という所だろう。

「かっこいぃ」
「るせっ」

頬杖をつきながら憎たらしい笑顔で茶化す鴻薙をあしらい、再び机に突っ伏し夢の中へ旅立たんとする。

「やっぱ寝るんだ」
「ホント眠てぇんだよ…勘弁してくれ」
「教師のメンツぐらい守ってあげなよ」
「…知った事か」
「君…実は中々の不良だよね」
「なんとでも言いなさい」

それだけ適当に答えると、迦具土は再び夢の中へ。
ちなみに、迦具土の左隣で、寝る訳でもなく、携帯ゲーム機ででっかい竜と死闘を繰り広げていた柴崎は、拳骨をくらい、携帯ゲーム機を没収された挙句、夏休みの宿題が倍になったのは迦具土の知る所ではない。

〜〜〜〜〜〜〜〜

深く深く闇の深淵まで沈んだかの様にテンションの下がった柴崎と、それをなだめる鴻薙と講堂館を出て高等部校舎前で別れ

た。

（自業自得だろうに、バカめ）

本日分の補修が終わり、事の顛末を鴻薙から聞いた迦具土は、普段なら腹を抱えて笑い転げる所だが、柴崎のあまりの落胆ぶりに少々気が引けていた。

まぁ、娯楽を奪われた挙句、元々山の様に積まれた夏休みの課題がもう一山盛られたとなると、当の本人の気持ちがわからないと言うほど薄情でもない。

間違いなく自業自得なのだが。

そんな柴崎の手には、歴戦の勇者になれるデバイスはなく、歴戦の勇者も手こずるであろう課題の山がしっかりと抱えられていた。

（鴻薙もよく付き合うよな、あんなのに…。補修なんかいらねぇくせに）

実は鴻薙、補修が必要な程成績は悪くない。かと言って特別いい訳でもなく、全教科、可もなく不可もなくこなす平均型である。

むしろ、出席日数や課題の提出、授業態度が完璧なため、通知表の成績は優等生の評価がついているくらいだ。

それにしても付き合いよすぎるだろ。と、迦具土は思っている。

幼馴染らしいが、確かに一緒にいる頻度が高い。仲がいいのは当然いい事だが、（ひょっとしてそーゆー関係…？）などと、身の毛もよだつ様な考えは、ボッコボコにして心の奥深くに硬く硬く封印を施した。

『――――！　――――！！』

「………？」

　人間として必ずくる生理現象をバッチリ水に流し、講堂館側の入り口とは反対の入り口付近にある上階へ続く階段に足をかけた所で、外からうっすらと叫び声の様なものが聞こえる。

（…子供……と…犬…？）

　注意深く音に耳を澄ませる。

　校舎に生徒が居らず、教師も職員室に閉じこもっているのだろう。完全に静まり返っている空間だからかろうじて聞こえる程の声だった。

　方向は駅側。グラウンドや噴水の広場がある方だ。

　柴崎と鴻薙が向かった方だが、気づいているのだろうか。

（………）

　迦具土は携帯を開き、時間を確認する。

　そして小さくため息をつくと、声のする方に歩き出した。

　『蓮神会』の一員として、どんな小さな事だろうと異変には解決に尽力しなければならない。と、教師のメンツは守らない迦具土は、校則よりも面倒な蓮神会の規則を一応遵守する。

～～～～～～～～

「……」
「あぁ、凍也」

様子を見に来た迦具土は、なんかもう、それはそれはめんどくさい気持ちになっていた。
噴水広場の駅側の端、景色との調和のため人工的に作られた小さな自然の中にそれはあった。
一本の木の上にしがみついている純白のワンピースに身を包んだ、長く美しい桜色の髪を持つ子供。印象としては少女だ。
その木の下には満面の気持ち悪い程晴れやかな笑顔で両手を広げている柴崎。
そして吠えまくる犬。木の上の少女にというより、柴崎に吠えまくっていた。明らかに。
傍のベンチに腰をかけて眺めていた鴻薙が、迦具土に向けて手をヒラヒラとさせた。

「何…これ」
「ご覧の通りさ。僕らがここを通ったらそこの木にあの子がね。あの犬に追われたのかな。それをアキが助けようとしてるのさ」
「あぁ…そう…」

犬に吠えまくられている柴崎と木の上の少女が、「さぁ大丈夫だよ。お兄ちゃんが受け止めてあげるからね！」「イーヤーだー！気持ち悪いー！！」などと、不毛なやりとりをしていた。

「ホントに…？」
「本当さ。確かに最初は、あの子は木の真ん中あたりにコアラみたいにしがみついてたけど、アキが助けようとしたらあんなとこまで

行っちゃったけどね」
「なるほど。本能的に嫌われた訳だ」
「そうなるね」
「ダメじゃねぇか。てか、お前の『力』なら簡単だろ」
「いやぁ、アキが頑張ってるから見守ろうと思って」
「母かっ。ちょうちょい母性みたいなの出すんじゃねぇよ」

ったく。と付け加えて、迦具土は頑張っちゃってる柴崎に歩み寄る。

「――――シッ！」

パカッ！と乾いた音と共に、柴崎のアゴに左ストレートが吸い込まれる様に決まる。

直後、両手を広げたままの体勢でその場に崩れ落ちた。

「…随分と中身のない音がしたな」
「お見事」

迦具土が柴崎の頭の物理的な内容に不安を覚えると、鴻薙がパチパチと手を叩いていた。

そんな鴻薙に、コイツらは本当に友達なんだろうか。と、迦具土は週に5回程思う。

木の上の少女はポカンとした顔で固まっていた。

「ごめんな。この変態が気持ち悪くて。降りれるか？」
「え？あっ…」

差し伸べられた迦具土の手に、木の上で固まっていた少女は無意識に手を重ねた。

そしてグイッと、半ば強引に引っ張られて落下すると、お姫様抱っこの形で受け止められた。
普通ならびっくりするだろうが、少女はまだ少しポカンと宙を見ていた。
改めて近くで見た少女に、迦具土は少しの不安を感じた。
目測での歳は１０前後、腰まである光る様な桜色の髪、ルビーの様に透き通る真紅の瞳、シミ一つない純白のワンピース。しかし、その足に靴がない。

（裸足…。それだけじゃ分かんねぇが、まさか『ロストチルドレン』じゃねぇだろうな）

『ロストチルドレン』とは、捨て子である。
その多くは都外からの捨て子で、『神都なら大丈夫』といった気持ちで犬猫の様に我が子を捨てて行く身勝手な親がたくさんいる。
ロストチルドレン用の保護施設だけで、２つ程の区が機能している。
神都では深刻な社会問題となっているのだ。

「あの…えと…」

迦具土の怪訝な視線に気づいた少女が口ごもり始めた。
それもそうだ。今もまさにお姫様抱っこ状態なのだから。

「あ、あぁ、すまん」

裸足なので地面に降ろすのを少しためらったが、流石に抱えたままというのもおかしいので、ゆっくりと足から降ろした。

「凍也…その子…」
「…わからねぇ。けどなんとも言えねぇな」
鴻薙も同じ懸念を抱いたのだろう。どう対応すればいいのかわからないといった顔で聞いてくる。
（裸足っつっても、ただ遊んでただけかもしれねぇし、別にそれ自体は珍しい事じゃねぇ。ただ…何だ…？何かが…違う…？）
迦具土はこの少女に対し、妙な焦燥感の様なものを覚えていた。それに伴い、えもしれぬかすかな不安、胸のあたりに感じる微弱な圧迫感。
この少女は『異なる』存在だと、本能が告げている様だった。
迦具土が顎に手を据え、思考に更けている間、鴻薙が少女に目線を合わせ話をしていた。

「凍也」
「ん？あぁ、悪い。何だって？」
「何でこんな所に居たのかって事しか聞いてないけど、駅前で野良犬の尻尾を踏んづけてしまって、それで追い回されてたらしいよ」
「またベタな…」
迦具土がちらっと犬の方に目をやると、倒れている柴崎の頭の辺りで片足をあげていたが、（あ、オスなんだ）と思う事にした。
そして迦具土も少女に目線を合わせる。

「えっと…名前は？」
「……マリア…です」

「マリアちゃんか。お父さんかお母さんは？」
「いま…せん」
「――ッ……そっか…ごめんな。どこから来た？」
「……」

すると少女は腕を上に掲げ、空を指差した。

「……ん？」
「……」

そこまで自分の事を示すと、マリアと名乗った少女は黙ってしまった。
言いたくないというよりは言っていいのかわからないといった表情だ。

「……どうするんだい？凍也」
「…わからねぇな。とりあえず蓮神会で保護する。名前がわかったんだ。『リスト』が使えれば身元は判る。会長と相談するさ」
「そっか。じゃあ任せるよ。僕らはこれで」
「おぅ、じゃあ――」

「探しましたよ――姫」

「――ッ！？」

唐突に背後から声がし振り返ると、５ｍ程後方に、赤紫の

髪にアメジストの様な深い紫の瞳、男性用の修道服の様な物に身を包んだ若い印象の男が立っていた。

（気づかなかった…？こんな近くに来るまで？――――――いや…

――――――いつから…この人数に囲まれていた…？）

迦具土、鴻薙、少女を中心に、謎の男と同じ様な距離で等間隔に１０人弱に囲まれていた。

顔は話しかけてきた男しかわからない。他の１０人弱は全身を修道服の様な物に包んでおり、フードを深々と被っていて顔がわからない。

「凍也…ッ」

「まて、動くな」

身を乗り出した鴻薙を左手で制し、迦具土は前方の男を見据える。

「ケツァル…」

「……？」

少女、マリアがつぶやいた。この男の名前か？…と迦具土は思考を巡らせる。

ケツァルと呼ばれた男は、その整った顔に不適な笑みを浮かべている。

「さぁ姫、そろそろいい加減に家出はお終いですよ」
「ぅ…うるさい！あんたなんかに『コレ』は渡さない！」
「……『下界』が『罪』に溢れても構わないと？」
「――――ッ！……あんたに渡すよりマシよ」
「……」

目の前で訳のわからない話が進んでいる。迦具土にはどうする事もできなかった。どうすればいいのかがわからないのだ。
そして当の二人の間には、迦具土と鴻薙は存在すら認識されていないような雰囲気である。
（なんなんだこいつら…？どっかの演劇部かなんかか？訳わかんねぇ事をベラベラと…）
隣の鴻薙もついていけないといった顔で見据えていた。

――――――ヴン…。

（――――ッ？）

大型の機械の電源を入れるような音とともに、男の手の中に一振りの剣が現れた。
いや、剣と呼んでいいのか。形は剣を形どっているが、無機質な鋭さはなく、触手の様に『蠢いて』いる。

「王は決断なされました。貴女がどうしても戻らないと言うなら、『聖杯』だけでも回収せよ。とね」
「――嘘ッ！もしそうだとしても、あんたにその任を任せるハズがない！」
「さぁ…『誰でもよかった』んじゃないですかね？」
「――ッ！――貴…様……！」

マリアがその可愛らしい顔を憎しみや怒りといった負の感情に歪めた。
それを見た男はまた不適な笑みを浮かべる。
迦具土は一連の会話や二人の表情、語調などを観察、対応策を迅速に行使する。

「鴻薙。柴崎と犬っころ連れて離れてくれ」
「…この子は？」
「あの男の狙いは間違いなくこの子だ。それにお前も見たろ、あの武器の現れ方。もしあの男の『力』がお前と同系等だとしたら、荷物を抱えて逃げる形になるお前は確実に不利だ。ここは俺がなんとかする」
「……わかった」

シュンッ。と乾いた音がしたかと思うと、鴻薙はおろか、柴崎も犬も、すでにその場から『消えて』いた。
「さあ姫、大人しく帰りましょうか。私とて貴女のその体を消し飛ばすような真似はしたくないのです」
「――ッ！」

グジュル…と、生々しい音をたてる剣を持つ男は、両手を広げゆっくりと接近して来る。

その顔を不気味な殺気を撒き散らす仮面に変えて。

「……待てよ」

迦具土は男の前に踏み出た。握った拳を突き出せば当たる程の距離。少し見上げる様な形でメンチを切る。

迦具土は１７０前半程の身長があるが、迦具土の頭頂部は男の顎の辺りだ。２ｍあるだろうか。久々に見た身長差に、少し威圧感を覚えた。

「…なんだ貴様」

「なんだはねぇだろ。ずっと目の前に居たんだからよぉ」

「ゴミに興味はない。どけ」

「随分な言われようだなオイ。小さな女の子にそんなモン振り回そぉとしてるお前こそ、人としてゴミクズ当然だろぉが」

「……愚かだな。神に歯向かうとは」

「あ？　――――！」

何言ってんだ電波野郎と言う前に、迦具土の頭上から狂気の剣が振り下ろされていた。

（2）（後書き）

はいどーも。羽崎ですよ（。゜。ω゜。）ノ

え？「黙れ羽虫」ですって？

ジャッジメントに訴えてやるぅぅ！

（」。ロ。）」〜ジャッジメントぉぉぉぉ！

はい。前回からジャッジメントの件が鬱陶しいのでやめます。

羽崎こと羽虫のお話はどーっスか？

一応頑張っておりますよ。と言っても結局は自己満足ですがね（・∀・）

バトルが書きたくてウズウズしているにも関わらず、動きなどをどう書けばいいのかよくわからないと言うね。

どーしたもんやら＞（・∀・）＜

でもまぁ頑張ります（。゜。ω゜。）ノ

でわ（。゜ω゜）ノ

（3）

『才覚者』。

この神都に存在する『特異な力』を持つ者。

脳内にて異常な脳波『才覚波』をエネルギーの消費によって任意に生産し、体内器官や物体、自然現象などに干渉させ、変化を生じさせる事ができる者。

筋肉に干渉させる事で筋力強化、骨に干渉させる事で骨密度を変動して耐久性の向上、内臓に干渉させる事で免疫力強化…など、その効果は多岐に渡る。

体内器官以外では、手を使わずに物体を動かしたり、植物の種の成長を急速に促進させたり、小規模な風を起こしたりなども可能である。

また、己を己と確証するための『自己理想郷（ピア・パーソナル）』を確立している者は、才覚波による現象を『超能力』として昇華させる。

『小物を少し動かす程度の能力』は『念動力（サイコキネシス）』へ。

『小さな火を灯す程度の能力』は『発火能力（パイロキネシス）』へ。

『考えがなんとなく分かる程度の能力』は『心理掌握（サイコメトリー）』へ。

それぞれが確立するピア・パーソナルによって、発現する超能力は異なる。

そして、どの程度の超能力が発現するかも、それぞれが確立するピア・パーソナルにかける『想い』や『信念』といった、精神的な物が強く呼応する事が分かっている。

そして――――――。

――――ギィィィン！！と、時代劇で刀と刀をぶつけ合う様な音が響いた。

「――――ッ？」

蠢く剣を振り下ろした男は、目の前で起きた現象に戸惑っていた。

左肩辺りから斜めに真っ二つにしたと思った少年には、傷一つついておらず、それどころか少年の右手に突如現れた、鍔の無い『氷の刀』に蠢く剣が受け止められていた。

「……」

「…何ビビってんだよ。『いきなり氷が現れた事』か？『たかが氷に剣が受け止められた事』か？」

男は訝しげに眉を寄せ、迦具土は余裕の笑みを浮かべる。

「――――神都じゃ別に、珍しい事でもねぇだろ」

ギィィィン！！と、一際強い音が響いた。

上から押さえつけられる形になっていた迦具土が、上空に拳を突き上げる形で剣と剣をぶつけていた右手を激しく横に凪いだ。それにより男の右腕が剣ごと激しく後方に弾かれた音だ。

男は素直に驚いた。

人を真っ二つにするというのは、切れ味のいい剣があった

とて簡単な事ではない。
ギロチンの様に圧倒的な質量で叩き切るならまだしも、剣ごときで真っ二つになるほど、人の体は脆くはない。
だからこそ男は、涼しい顔をしていても、『叩き潰す』くらいの力を込めていた。
それがいとも簡単に受け止められた挙句、弾き返されたのだ。
迦具土にとっては、氷の刀の発現と同時に、才覚波を生産し、右腕・僧帽筋・胸筋・背筋に干渉し、単純な腕力を向上させていたに過ぎないが、その仕組みを知らないのであれば驚くのも無理はない。
「ハァ？」
ヒュッ！と、氷の刀が空を切った。
右下から左上へ、鋭い剣閃が突き抜けたが、手応えは全くなかった。
朧な残像を残し、男は１０ｍ程後方に移動していたのだ。
「――――――ッ！！」
しかし、男に体制を立て直す暇はなかった。
男の視界は突如、夕日より鮮やかな橙と紅に染まる。
当然、そんな時間ではない。
――――――２ｍにもなろうかという男の全身が、『紅蓮の炎』に包まれた。
「ぐぉ！」

炎に包まれただけのはずの男の体は、大きく後方に吹き飛ばされた。
迦具土の左手から発せられた小さな『火種』は、圧倒的な質量・熱量で燃焼し、空間すらも飲み込む形で次々と連鎖的に発火を起こす。
もはや『爆発』と呼ぶべきそれは、巨大な『熱の壁』となって男に叩きつけられた。

――炎と氷。正確には『一定空間の気温と湿度、酸素及び水素の密度操作』。
そして、炎と氷という両極端の力を振るい、敵を蹂躙し殲滅するその超能力は、『燃える氷』になぞらえ、こう呼ばれる。

――能力名、『紅蓮氷河（メタンハイドレード）』。

「おいおい、終わりかよ。俺はまだ一歩も動いてねぇぞ？」
迂闊に動ける状況でもねぇが…と、言葉を発しながらも思考に付け加えながら、前方に倒れている男を注視する。
相手は一人ではない。今この状況にも、迦具土とマリアという少女は１０近くの人間に囲まれている。
しかし…。

（……全く動かねぇ。…そもそも生きてんのか？）

周囲の人影には、『存在感』こそあるものの、置物の様に微動だにしない。『生気』というものが微塵も感じられないのだ。

（…操られてんのか？それとも本当に人形か何か…。だとしたら『操人形劇（マリオネット）』？　テレポート系の能力と共存することはないはず…）

「――――フ…フハハハハ……ハハハハハハハ」

「！」

倒れたままの男が不意に笑いだした。

そして、メキメキメキ…。と、軋む様な音をたてながら、重力を無視した動きで、起き上がり小法師の様に起き上がる。

「なるほど…。『神都』か。確か三貴神（さんきしん）とやらが創ったという。それなら稀有な力を持つ人間も珍しくはないか」

「……？」

「……くだらんな」

男がその右手を、蠢く剣を掲げると、まるで花が開く様に剣が割れ、毒々しい程の紫の炎に包まれた『剣身』と呼べそうな形をした物が現れた。

「人間相手に使う事などないと思っていたが……ちょうどいい、試しておくとしよう」

「――――！」

バサバサバサ…。と、乱暴に衣服を脱ぎ捨てた様な音がした。

迦具土が振り向くと、　周囲の者達が身に纏っていた修道服の様な衣服が抜け殻の様に乱雑に地面に落ちていた。

かろうじて視界に捉えたのは、修道服の顔の辺りから、青白い『何か』が抜き取られる様に出て行き、完全に出きったところで周囲と同じく、乱雑に衣服が落ちるところだった。

そして、抜き取られた『何か』は、紫の炎に包まれた剣へと吸収されていく。

周囲の人数分の『何か』を吸収し終えた剣は、花弁の様に開いていた元剣身を、男の腕へと巻きつけていく。

――――――ヴン…。という機械の始動音の様な音を迦具土が認識した時には、すでに男は迦具土の目の前で、その禍々しい剣を振りかざしていた。

「――――――ッ！！」

避けるのは間に合わない。そう直感的に判断した迦具土のとった行動は『受け止める』だった。

だが、この判断を愚かな判断だったと悔いる事になる。

――――――キンッ。と、フォークとナイフを打ち合わせる様な軽い音と共に、剣をも受け止める程の硬さを誇る迦具土の氷の刀は、あっけなく切り捨てられた。

それと同時に、左肩から右下腹部へ、焼ける様な鋭い痛みが突き抜ける。

体が二つにならなかったのは、氷の刀が切られた瞬間に、

本能的にバックステップをしていたからか。

「――――――ッ？」

痛みに対する叫びをあげる前に、次の異常が始まる。

傷口から噴出する血液が、先ほどの『何か』と同じ様に、紫の炎に包まれた剣へと吸収されていくのだ。明らかに傷口に見合わない程の量の血液を引き摺り出して。

何が起こっているのかわからないが、これ以上血を吸われるのはマズイ。そう判断した迦具土は、倒れゆく体で受け身を取ろうともせず、応急処置を始める。

まずは才覚波を大量に生産。それに伴うエネルギーの消費も鑑みるべきだが、今はそんな暇はない。

生産した才覚波を、大脳の『中心後回』へ干渉。『外部からの刺激を痛みとして認識』する機能を抑制。自身の体を、一時的に麻酔にかかった状態に。

さらに、全身の骨、主に骨盤の『腸骨』に干渉。骨髄の『造血作用』を急速に強化・促進。失血死の可能性を下げる。

そのまま下半身の全ての筋肉に干渉。脚力を瞬間的に超強化。地面を蹴りつけて宙へと翻る様に後方へ移動。『血液を吸収する』剣の効果範囲から脱出した。

この間、およそ3秒。これは迦具土の実戦経験、体内構造の熟知、生産可能才覚波の絶対量の多さにより実現できた『技術』と言えるだろう。

（――――痛ッ…。…マズイな…）

並の才覚者には到底できない技術を見せつけたが、事態は何一つ好転してはいない。

痛覚を遮断しはしたが、最初に受けた痛みの余波が重苦し

い痛みとして全身を包む。
傷口に才覚波を干渉し、血液の凝血作用を強化した。これにより出血自体は止まっているが、あまりの出血量に造血作用が追いついておらず、視界が眩む。
斬撃を受けた際に鎖骨を切断された、もしくは砕かれたか、左肩が全く動かない。
そして立ち位置。大きく後方へ移動したため、自身と男の間にマリアを置く形になってしまっていた。護衛対象を敵の前に差し出すという、普段なら絶対に冒さないミスだった。

「ケッァル……あんた…ッ」

敵の前に晒された少女は、それでも力強く男を睨みつけていた。

「ははっ。中々おもしろいですね姫。人間は『血』が『魂』の象徴であり、『罪』の証とでも言うのでしょうかねぇ」
「何…考えてるのよ…。実体を持つ人間にそんな物振り回すなんて…ッ」
「おやおや、そんな恐い顔しないで下さいよ。好奇心ですよ、好奇心」
「……」

少女は力なく俯き、だまってしまった。
その手は強く握りしめられ、小刻みに震えている。
言い返せないのだろうか。道徳的な観点から追及すればいくらでも言う事はあるはずなのだが。
少し振り向き、横目に迦具土を見た少女は、申し訳なさそうに目を瞑った。

「……」

その顔は当然、迦具土にも見えていた。

そして、迦具土がその『決断』をするのは、それだけで十分だった。

「さぁ姫、帰りましょうか。いや、還りましょうか」

「……」

「――――――ゴメンな」

――――――ブゥン！と、長い物を無理矢理振り回した音が響く。

それと同時に、少女の体が宙に浮く。

「ふぇ？」

「なっ？」

ザッパァァァン！！と、少女は近くの噴水の中へ一直線に落ちて行った。

迦具土の手には、物干し竿を限界まで伸ばしたよりも長い『槍』が握られていた。

使い物にならなくなっていた左の鎖骨を、氷でつなげる事で無理矢理動くようにした。痛覚を無視できる今だからできる芸当だ。

そのまま即座に槍を生成。少女の服に引っ掛け、投げ飛ば

した。
怪我をしないか懸念されたが、今は少女を噴水に放り込むのが『安全』だと判断した。
「貴様ぁ？」
「はっ。叩っ切ろぉとしてたお前に、激昂する資格があんのかよ」
迦具土は右腕を水平に横へ。槍を手放すと、空気へ溶け込む様に解けて消えた。
「よかったなぁ。見ず知らずのヤツに見せんのは初めてだぜ？」
「……」

「おぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ゴォォ！！と、腹を震わせる様な重低音を響かせながら、迦具土の右手から尋常じゃない程の質量の炎が噴出する。そしてその炎は、太陽のプロミネンスの様に迦具土の手へと戻って行き、手の中で何かを形どっていく。
通常、迦具土が力を使う際、炎なら、酸素密度を操作し、相手へと濃い酸素で出来た『酸素の導火線』を作り、湿度を下げ、温度を極限まで上げる事で自然発火を起こして導火線に着火させる。
氷なら、酸素と水素の密度を操作し、水分子を生成。湿度を上げ、温度を極限まで下げる事で氷を作る。さらにそれを年輪の様に何層にも重ねゆく事で、鉄の様な強度を作り上げる。

『才覚者』はあくまでも『超能力者』だ。『魔法使い』などではない。
質量保存の法則は絶対だし、物理法則も軽々と無視はできない。テレポートの様な例外もあるが。
当然、無から有を創り出す事などできないし、物質を異なる物質へと作り変える事はできない。紙から鉄は作れないのだ。
しかし、今の迦具土はこの全てを無視していた。
自然発火ではあり得ない程の量の炎。さらにそれを不自然に捻じ曲げる。そしてその炎は、迦具土の手の中に何かを創り出す。非物質のはずの炎が、物体としての実体を持つ何かに。

「なんだ…それは…」

炎の噴出が収まり、迦具土の手には一振りの『刀』があった。
今までの氷の刀とは違い、鍔もあるし、刀身もれっきとした金属である。その刀身は、相当な熱を帯びているのか、ポツポツと周囲の空気を発火させていた。
赤黒い柄の先端からは、橙色の紐が伸びており、さらにその先端には、ルビーの様な真紅の珠がついている。

「なぜ貴様が…『神器(じんぎ)』を持っている！！」
「……うるせぇな。知るかよそんなモン。これ出すの疲れんだ。一瞬で終わらせるぞ」

神器とは何かを問いただしたかったが、すでに迦具土は疲労困憊。面倒事は少しでも避けたかった。
腰を低くし、居合い斬りの姿勢で力を込める。言葉通り、『一瞬』で終わらせるために。

「あぁ、加減は出来ねぇからさ、死にたくなかったら頑張れよ」
「――――ッ？」

「――――獄焔（ごくえん）・一文字（いちもんじ）」

ヒュッ！と、迦具土の刀が真横に一直線に振られた。
その時点では何も起こらず、馬鹿にされたと思った男が、迦具土を斬るための所動を起こそうとした――――その時。

――――ッボガァァァァ！！と、迦具土を起点に、刀を振った軌道になぞる様に扇状に『爆発』が起きた。プラスチック爆弾を扇状に敷いて爆発させるのを想像するとわかりやすいだろうか。
測った場合、長さは２０ｍ程あるだろう。爆発に『厚さ』という概念はないだろうが、これも測った場合は３０ｃｍあるかないか。
その『爆炎の扇』は、迦具土の視界にある木々の、少し離れた位置にある噴水の像の、真ん中辺りから上を吹き飛ばした。
そして…。

「――――ゴッ……ガッ…！……」
「……だから『頑張れ』っつったじゃん」

パシュッ。と、迦具土の刀が光の粒子となって霧散した。
男のダメージは、誰が見ても深刻だった。
口からは酷く粘着質な血液が溢れ、腹部は当然ズタズタ。

『腹部に爆発が当たった』ではなく、『腹部も含めて爆発した』のだ。外も中も激しく掻き乱された。無傷な臓器はないし、元の位置にあるかもわからない。
直撃したので迦具土も内心肝を冷やす思いだったが、体が『千切れて』いない所を見ると、何らかの防御をしていたのか。
男は、自身が吐いた血の中へと倒れた。それと同時に、男の持っていた剣が地面に突き刺さる。

（……これで懲りたろ。とりあえず…『黄泉の門番』に預けりゃなんとかなるか）

迦具土がポケットから携帯を取り出し番号をプッシュする。
コール音が鳴っている時に、少女が噴水の淵から頭を覗かせていたのが見えた。安否確認が出来たので電話に専念する。

『…はい？』
「あぁ、先生？俺。迦具土だけども」
『……僕個人用の携帯番号…教えたっけ？』
「まぁまぁ。ちょっと時間なくてさ。急患一人お願いしますわ」
『……あのね…今日はものすっごく久しぶりのオフなんだよ？』
「あんたいっつもオフでしょ。社会的に」
『……なんか疲れちゃったなぁ』
「おおおいおい、すんませんすんません、マジで急患なんだって。
――――――！」

迦具土が振り向くと、そこにあるはずの男の体は無く、剣も消えていた。

「……やっぱいいや。オフを満喫しておくれ先生」
『え？ちょっ――――』

無理矢理電話を切り、身構える。
１０秒ほどで身構えを解く。男は『瞬間移動（テレポート）』の力を使っていた。攻撃するつもりなら、電話中にいくらでも出来たはずなのだ。
（…逃げた？反撃のチャンスならいくらでもあったのに？……まぁ、逃げる元気があるなら大丈夫か）
――ブブブブ…。と、携帯のバイブが作動する。
「ん？――――――！！！！」
着信。その画面には『会長』と表示されている。
「……やべぇ……」
真夏の午後。
迦具土はこの一瞬で風邪をひいたかの様に身震いし、命のやりとりの時よりも嫌な汗が身体中から溢れ出た。

（4）

「どういうことかしら？」
「…いや…その……」
迦具土（かぐつち）は、禊月（はらつき）学園高等部校舎2階南端、会議室に居た。
通常の教室2部屋分の広さに、びっしりと並べられたシステムデスク、正面には巨大なモニター、最新鋭の設備が導入されている教室だ。
そして迦具土は今、その最新鋭のシステムデスクにつく訳で無く、中央の通路的な所に正座をさせられていた。

「はっきり答えてみなさい」
「いや…だからですね会長……事の顛末は今言った通りで…」

通路正面、教卓に座り、脚を組んだ姿勢で問いただすのは『会長』と呼ばれる女生徒。すぐ横にはマリアが居る。
その名の通り、禊月学園の生徒会組織『蓮神会（れんじんかい）』の会長（？？）こと、新城麗羅（じょうれいら）である。
高等部3年。蓮神会会長。成績優秀・スポーツ万能・眉目秀麗・品行方正。
身体的特徴は、黒漆の様な上品かつ滑らかな黒髪パッツン。大きな瞳は常に余裕を醸し出す。巨でもなく貧でもない女性特有の母性の象徴。太すぎず細すぎない健康的な肢体。黒ニーソ（制服限定）。『褒め言葉』とされる物を幾ら並べてもお釣りが来そうな純和風大和撫子だ。
さらに、新城は『財閥（？？）』のお嬢様である。神都の一二を争う程の

大財閥で、その財閥が手がけた物を見ない日はない程だ。
禊月学園は新城財閥の全面バックアップを受けているため、施設も設備も全てが新城財閥製である。
そんな完璧お嬢様は、教卓に座り脚を組むという、はしたないにも程がある格好で迦具土を見下ろしている。

「だからね凍也…。私が聞きたいのは…」
「……」

「――――なんでこの子がケガしてるのって事よぉぉぉ！！！」

――――ゴン！！と、迦具土の顎が蹴り上げられる。
んがぁ！と、情けない声を上げてそのまま後ろに倒れる。正座の脚はそのままに。
ニーソの脚を振り上げるもんだから、秘部を包む悩ましい布が見えてしまったが、脚アッパーカットの威力は5秒程の記憶を飛ばし、思考を停止させる。

「ごめんねぇ、この出来損ないの蛆湧き生ゴミヤンキーが。痛かったでしょう？本当ごめんねぇ」

新城は横に居るマリアを抱き寄せ、頭を撫でながら頬をスリスリしている。大きな目をパチクリさせて唖然としているマリアはされるがままだった。
脚を組んだまま体を傾けているので、体のラインがなんとも艶かしい事になっている。

（こ…の…女(あま)…ッ。いつか絶対痛い目にあわせてやる…）

新城は簡単に言ってしまえば、『かわいいもの』に目がない。物や動物はもちろん、『美少女』ならなおさら。品行方正キャラが完全崩壊デストロイである。

その大好きな美少女が右ひじにケガをしていた。

原因は、迦具土がマリアを謎の男から守るために、あるいは自分の力に巻き込んでしまわない様に、一番安全だと判断して噴水の中に投げ込んだ際に軽く打ち付けたと思われる打撲であった。

「噴水に投げ込むなんて…どんな神経してるのよ。風邪引いてたらどうするつもりなの？」

「……」

迦具土は最早言い訳がめんどくさくなっていた。

噴水に投げ込まれてびしょ濡れだったマリアは、迦具土の『気温・湿度操作』の力でちゃんと乾かされてはいた。

むしろ打撲程度で済まされているのは褒めるべき成果だ。普通に地面に投げ飛ばしたりしていたら大怪我は当然だったし、子供がプールとして遊ぶ程巨大な噴水だったので、水のクッションを利用出来た。

『獄焔(ごくえん)・一文字(いちもんじ)』を繰り出す時も、水の中なら安全圏だった。噴水の像が壊れた時はひやっとしたが。

「さぁ、凍也」

「？」

うっかり惚れてしまいそうな美しい笑顔で呼びかけられる。

いつまでも変な格好で寝ている訳にもいかないので、首をかしげ

ながら起き上がる。

「土下座」

「ハァ？」

「あぁ？」

「申し訳ございませんでした」

実に滑らかな動きで頭を下げた。怖かった。

我ながら完璧な土下座だ。と、情けない評価をしてしまった時点で『プライド』が引き千切られた気がして……涙が出た。

「さて、おふざけはこの位にしましょう」

「？」

ふざけてやがった！！と、心に思うだけにした。

マリアの頭を優しく撫でながらも真顔になる新城。

「さっき蛆湧き生ゴミヤンキーが言ってたその男…気になるわね」

（あれ？まだふざけてんのか？）

「具体的に教えてくれるかしら？」

「…はい」

蛆なんて湧いてねぇしヤンキーでもねぇ。と、これも心に思うだけにした。

「基本は『瞬間移動（テレポート）』だと思われます。急に武器を出現させたのは『距離差間移動（アポート）』か『可逆圧縮（ロスレス）』。周囲の人間と思われる者たちの状態からみて『心理掌握（サイコメトリー）』を疑いましたが、人間ではなかったと判断して『操人形劇（マリオネット）』系の能力と判断しました。……いずれにせよ、共存するはずのない能力を幾つも使用してました」

「多重才覚者……が存在するということかしら？」
「いや……超能力では説明しきれない現象も幾つかありました。特にあの男が持っていた剣は意味不明だったし…」

「……『神業（かみわざ）』…？」

「……まさか。『それ』は１０人しかいないはずです。――俺と会長を含めても」

「……そうね。…まぁいいわ。とにかく、その男にマリアちゃんをまた会わせる訳にはいかないわね」
「そっスね。もし次があるとしたら同じ風に撃退出来るとも限らないし、仲間がいる可能性もあります」
「という事で、マリアちゃんをよろしくね。凍也」
「……へぁ？」

語尾にハートがついていそうな語調に一瞬心臓が跳ねた。そして意味を理解し、素っ頓狂な声を上げて恥ずかしくなる。

「いやいやいや！！会長のとこに居た方が安全でしょ！！」
「相手が普通の人間なら…ね。確かにうちの対一般人用のセキュリティ技術は世界一の評価を頂いているわ。でもあくまで対一般人。超能力を振るう才覚者に対してはふすまも当然よ。だからこそ、貴方と『あの三人』が居る常盤寮（ときわりょう）に預ける方がよっぽど安全だとは思わない？」
「…そりゃそうかも知れませんけど…」

「それに私、仕事が忙しいから中々家に居ないしね」
「……」

あんたが俺に仕事押し付けるせいで、出席日数足りなくなって補修受けてんですけどね。と、やっぱりこれも心に思うだけにした。

「じゃあ、私はそろそろ仕事に戻るわね」
「……因みに、今日の仕事は？」
「今日はただの書類整理よ。次の定例会に使う資料のね」
「……じゃあもう一個因みに、なんで俺を呼んだんスか？」
「書類整理してたら爆発音が聞こえたんだもの。面倒だったから貴方に処理させようと思ったら、貴方がやった事だって言うから」
「……なるほど」

あんな技使うんじゃなかった。心から後悔した瞬間だった。

「またね、マリアちゃん」
「！！」

新城はマリアの頬に軽い口づけをして揚々と会議室から去って行った。マリアは顔を真っ赤にして『はわわわわ』となっていた。

（『リスト』の事言うの忘れてたな…まぁ、会長なら察してくれるだろ）

『リスト』とは、各番区が管理する住民票の様な物で、住所・年齢・連絡先・所属などが事細かく記されている物だ。
閲覧・検索に際し、中央統括行政区へ使用申請をしなければならず、使用目的を細かく記載した申請書類と、悪用しないという誓約書と、結構な額の使用料を納める事で初めて『申請』が完了

する。
　それから『許可』が下りるまでかなりの期間が空いてしまう事もあり、許可されない事もある。その場合は当然、納めた使用料は返還される。

（…この子がどこから来たのか…自分の口からちゃんと言ってくれれば助かるんだが…）
「まぁいい、行こうか……マリアちゃん」
「ふぇ？ふぁ、ふぁい！」

　家出の理由なんて言いたかねぇわな。と適当に見切りを付け、常盤寮へ戻る事にした。
　マリアが動揺している姿がかわいいと思ったのは、そっと心の奥に閉じ込めた。

「と、その前に…保健室寄って行くな」
「？」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ん〜〜…。咲子（さきこ）さんになんて説明すればいいか…」

　校舎を出て、グラウンドを歩きながら頭を抱える迦具土。その姿は、『田中』というベタすぎる名前が入った、上下青のジャージ姿である。保健室に常備されている、卒業生達が要らないからと寄贈（？）していった緊急時の着替え用体操服だ。

迦具土の制服はバッサリ切られたし血だらけだったので、そのまま出歩く訳にはいかなかったのだ。

「いとこ…？…いや、身内系はダメだな…すぐ嘘とバレちまう」
「……あの…」
「ん？」

申し訳なさそうにマリアが話しかけてくる。

「やっぱり…迷惑…ですよね？」
「……」
「…私の事は…放っておいて下さい」

向きを変え、どこかへ歩き出そうとするマリア。

「…どこに行くんだよ」
「……どこか…」
「わかんねぇよそれじゃあ。行くアテがあんのか？」

その問いに、俯く事で無言の否定をしめす。迦具土には少し震えているようにも見えた。

「…またあの男が襲ってくるんじゃないのか？」
「大丈夫です。今までも逃げて来れましたから」
（……「今までも」…ね…）
「さっきは…守ってくれてありがとうございました」

それだけ言うと、マリアは俯いたままヨロヨロと歩き出す。その背中は、かなりの疲労を伺わせたし、何より行くアテなど無い事を物語っていた。

「まてぃ」
「――――！」

ガシッ！と、力強く頭を掴む。迦具土の手は大きい訳でもない普通な手だが、掴んだ頭の大きさは、マリアがまだ小さな少女である事を再認識させる。

「ここで君を見逃すと、俺が会長に行方不明にさせられちまう」
「え…？」
「まぁ、何があったかなんざ知らねぇよ。人ん家の事情は知ったこっちゃねぇしな」
「……」
「だけどあの男は少なくとも『家出少女を連れ戻しに来た保護者』には見えなかった」
「……」
「『狙われてる』…。って事じゃないのか？」
「……」

――――頷いた。
やはり無言であったが、初めて肯定の意を示してくれた事に、迦具土は少し安堵した。

（やっぱりか…。この子はあの男にとって何か利用価値のある『力』持っている？…いや、この子は『コレ』がどうとか言ってたな…）
「……でも…」
「ん？」

マリアが小さく口を開く。その一言は重苦しく、今までで一番申し訳なさそうに響く。

「でもやっぱり、迷惑をかける訳にはいきません。私は大丈夫ですから…」
「……信用出来ないか？」
「……」

マリアは、言葉にあった通り、『今までも』逃げて来た。何度逃げて来たのか、それは彼女にしかわからない。
ただ彼女は、『逃げる』事で初めて『狙われる』中で安心を得ていた。
その中で突然、『保護される』形になってしまうと、彼女は安心を得られなくなってしまう。一カ所に留まるということは、彼女から『逃げる』という行動を奪ってしまうのだ。
だから本心は、『迷惑をかけたくない』というより『逃げられない不安』の方が大きいはずで、彼女にそれは耐えられなかった。

「――――会長はよぉ」
「……？」
「あ、さっきの女の人の事な。あの人はすっげぇ強ぇ。俺が本気で挑んでも、１０秒で３回は殺されるね」
「……」
「鴻薙っつって、長い白髪でほっそいヤツ居たろ？あいつのテレポートはすげぇ。本気出せば５００ｍくらい飛べるらしい。そこまで飛んだの見た事ないけど」
「……」
「あと…柴崎っつって、君がつかまってた木の下に居たあの気持ち悪いヤツ。あいつとは絶対に本気でケンカしたくねぇな。ガチで闘ったら絶対に勝てる程の自信がねぇ」
「……」
「とは言っても、俺だってそこそこ強ぇ自信はある。並大抵のヤツ

なら負ける気がしねぇぞ」
「……」
「それに…あれだ…。常盤寮って所にもさ、すげぇヤツは居るぞ。色んな意味で」
「……違うんです」
「ん？」

終始黙って迦具土の言葉に耳を傾けていたマリアが口を開いた。
「強いとか強くないとかじゃないんです。あの男…ケツァルは……『人間』に勝てる相手じゃない」
「……」
「さっきもそう。あなたは決して勝ってなんかない。あれは『器』が傷ついてしまったから『還った』だけ。また何度でも追ってくる。今度はあんな油断する訳がない」

訳のわからない事を…と、思う迦具土だが、同時に、今この状況で嘘など言うはずがない事も察していた。だからこそ…。

「じゃあ…あいつは何なんだ？…いや、君もか。『姫』とか呼ばれてたな。それも何か関係あるんだろ？」
「……」
（答える気はナシ…か）
「……あいつは…私たちは…」
「？」

この訳のわからない事をぬかす少女をどうやって連れて帰ろうか、と、本格的に悩み始めた（誘拐的な意味じゃなくて）迦具土の耳に、さらに訳のわからない事がぶち込まれる事になる。
そして、今日という日をこれから一生後悔する羽目になろうとは、

迦具土は知らない。

「――――こちらの世界で言う、『神』……です」

（5）

「……ぁん？」

迦具土（かぐつち）我ながら酷い顔だと思っていた。少なくとも自分より小さな女の子に向けるような顔ではない。なぜなら、この顔は日頃、柴崎に向ける顔だったからだ。

「信じてませんね。完全に」

「……あ～…いや～…」

口を尖らせたジト目でふくれるマリア。が、特に気に留める様子もなく続ける。

「ケツァルは…あの男は『ケツァルコアトル』。こちらの世界では『豊穣神』として崇められる存在です」

「…へェ～。実りに感謝も糞もねぇ豊穣神ですこと」

「むぅ…。私たちの事を訊いてきたのは貴方ですよ？」

「あ～へいへい。何？君は『聖母マリア』です。とでも言うのか？」

「その通りです」

「やったー当たったー。ってバカっ！！」

「みゅっ？」

突然の怒号に跳ね上がり、小さなお手々で頭を抱え、子犬ばりにプルプル震える、ピンクロングヘア・クリクリお目々・純白ワンピース少女マリアを見て、やりすぎたか？と、一瞬思った迦具土だが、

なんか可愛かったのでどうでも良くなった。

「……ったく…。その手の『お話』が大好きなヤツが寮に居るから、そいつとゆっくりお話して下さいな、聖母様」

「むぅ〜…」

少しぷんむくれて迦具土を睨みつけたマリアは、何を考えたか、てててて、と迦具土から距離をとった。

「わかりました。そこまで言うなら……見せてあげますよ」

「？」

すぅ…。と、距離をとったマリアが、迦具土に向けて右手を向ける。

直後。

「ッ？」

ボ…ボボ…ボボ…。と、マリアの右手に渦巻く様に『紫色の炎』が現れた。

それは、ケツァルと呼ばれる男が持っていた『蠢く剣』にまとわりついていた物とまるで同じ。明らかに不健康な色で燃えていた。

「――――えいっ」

「ッ！」

――――ゴォォ。と、マリアの右手から、毒々しい炎が放たれ、迦具土へとまっすぐに向かって来る。

それに対し、迦具土も同じく右手をかざし、『一定空間の温度と湿度、酸素及び水素の密度操作』の力を使い、空気中に水分子を生

成。温度を下げ、湿度を上げる事で『氷の板』を生成した。
しかし、ただの氷ではない。年輪の様に、この場合はミルフィーユのように何層もの氷を重ねる事で、鉄並の強度を実現した『氷の盾』だ。
マリアの攻撃（？）は、規模も小さく、遅かったので、真正面から受け止めるに足ると判断したのだ。
しかし…。

――マリアの右手から放たれた毒々しい炎は、初めからそこに何もなかったかの様に、迦具土の氷の盾をすり抜けた。

「なぁ？」

完全に予想外の事態に、回避が遅れ、迦具土は紫の炎をまともに浴びた。

「……？――――！！」

だが、不思議と熱さを感じなかった。
目を開け、自身を見ると、確かに燃えている。――衣服ではなく、体が。

「な…んだ…これ…。何がどうなっ」

――ドクン。

「！！――――ッごあぁぁぁあぁぁぁぁぁああぁぁぁぁぁあぁぁあぁぁ！！！！！！」

突如、迦具土の体に、おおよそ人間が経験し得ない程の激痛が走る。

焼かれ、殴られ、刺され、斬られ、裂かれ、すり潰される様な痛み。

これは耐えられない。そう判断した迦具土は、『才覚波』を生産。大脳の『中心後回』へ干渉。痛覚の麻痺を試みた。

（――――ッ？。効かない？。なん…で…！）

――ゴワッ。と、のたうちまわる迦具土の視界が突如、眩しい程の銀色に染まる。それと同時に異常な痛みが嘘のように消えた。

「……？」

自身を見ると、体を燃やしていた（？）紫の炎は、水銀の様な『銀色の炎』に変わっていた。

「これは…？」

「――――『煉獄（れんごく）』って知ってます？」

「――――ッ」

声のした方に振り向くと、距離をとっていたマリアが歩み寄って来る。その左手には、銀色の炎を放った名残であろうか、ポツポツと銀色の火が残っていた。

「……天国と地獄の間にあるっつう…」
「正解。正確には『天界』…天国寄りです。じゃあ、何をする所だと思います？」
「……あいにく、神話には詳しくない」
「簡単に言えば、『堕界』…地獄に行く程でもない、魂の『罪』を浄化して行く所です」
「…それが？」
「私が今使った炎は、その煉獄の物です」
「……」
「紫の方が、『罪』を焼き払うための『浄化の炎』。銀の方が、罪を持っていた魂の、罪の履歴を焼き払い、天国に入るにふさわしい物にするための『調和の炎』です」
「……そんなものを信じろと？」
「信じる信じないは勝手ですけど、私は訊かれた事を答えているだけですよ」
「……」
「地獄には『断罪の炎』というのがあります。これは、魂を罪もろとも焼き、罪と同化した魂に永遠の苦しみを与えます」
「……怖い怖い」
「で、『浄化の炎』は『断罪の炎』の劣化版だと思ってくれていいんですけど、それでも力が強すぎるんです。魂ごと焼き兼ねない。そこで『調和の炎』です。相反する特性を持った物をもって中和し、魂本体が焼かれるのを防ぐんです」
「……酸とアルカリみたいな？」
「何ですかそれ？」
「……ゴメン。続けて」

中和を知っといて酸とアルカリは知らないのか。と、訳のわからない神様話にぶっちゃけついていけない迦具土。
そんな事よりも、今はこの家出少女を保護するための言い分が思

いつかなくてプチパニックである。

「簡単な事です。今の苦しみは、罪を焼かれる苦しみ。もっとも、魂の状態であれば、直接的な苦しみなんて無いですけど」

「……」

「よかったですね。断罪の炎だったら、今ここで悶え苦しんで死んでましたよ？」

「……」

「――――――『人殺し』は最上の罪ですから」

「……」

少女は笑顔を崩さない。友達と遊ぶ様に。好意を寄せる人と共に過ごす様に。

その笑顔は、迦具土の心境を知ってか知らずか…。

「……適当な事言ってっとよぉ、いくら小さな女の子でもシバくぞ？」

「適当じゃないですよ。私は魂を司る種族ですから」

「……そーかい。もういいか？とにかく君を連れて帰んないと、会長にシバかれちまう」

呆れたように迦具土は立ち上がり、両手を広げる。

するとマリアは、晴々しい笑顔を挑発するような笑みに変えた。

その口から…。

「１人や２人じゃないですよね？」

「――――ッ！」

「ん～…１８４…人？　名前も知らない人達。見るも無惨に虐殺の限りを尽くした」

「……」

「これは酷い。罪のない人達をこんなに。それでも同じ人間ですかぁ？」

「……」

迦具土の顔を覗き込む少女は、その愛らしい顔を、醜悪とも呼べる笑みで歪めていた。

「――――ははっ。ははは…ははははは！」

「――――？」

「『罪のない人達』…ねぇ。確かにそうかもな。そいつらは指示された『仕事』をしてただけなんだもんなぁ」

「……仕事？」

「あぁ。とってもとっても悪趣味なお仕事をな。……でもしくじったな。ちゃぁんと全員殺ったと思ってたけど、１６人も逃がしてたか」

「……え？」

少女の顔に笑みは無かった。話の主導権を握っていた少女は、全てが迦具土に傾いていくのを感じていた。

今、醜悪な笑みを浮かべているのは、迦具土だ。

「わかった。信じてやる。神かどうかじゃなくて、『超能力』じゃ説明出来ないその力を。『神業』にも、他人の過去を覗けるヤツ居るしな」

「……？」

「もしその話が本当なら、残りの１６人もちゃぁんと消さないとな」

「……え？」

先程までとは一転、少女は明らかに、迦具土に対して怯えを抱いていた。

迦具土は、醜く歪むその口を、手で押さえ込んでいた。

――――――ブブブブッ、ブブブブ…。

『田中』のジャージのスボンから、携帯の着信バイブレーションが作動した。

「おっおっお？……会長？」

携帯を手に取ると、その画面には、『会長』とある。蓮神会会長、新城麗羅（しんじょうれいら）からだ。

「はいもしもし」

『あぁ、凍也？　今、常盤寮に『才覚者用セキュリティプログラム』を送っておいたから』

「……へぁ？」

『機材も送ったわ。セッティングは任せても大丈夫ね？』

「いやいやいやいや、何スか急に？」
『貴方の言ってた『男』に用心してって事よ。安心なさい。『才覚波に反応する』物じゃなくて、『空間に非常識的な動きがあった場合に反応する』タイプだから』
「なるほど。了解です。……珍しいですね。『都城（みやこのじょう）』に頭下げたんスか？」
『馬鹿な事言わないで、誰があんな男に。馬鹿言ってるとすり潰すわよ』
「すんませんしたぁ」
『…ちゃんと買ったのよ。『客』としてね。言えばくれるんでしょうけど、借りの一つも作ろうものなら、何を言われるかわからないもの』
「確かに。…因みにお幾らくらいで？」
『0が一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ…』
「あ～、もういいっスわ。流石金持ち」
「はした金よ、この程度」
（あんたに実は彼氏が居ないのはその狂った金銭感覚と人の話を聞かない癖が絶妙にかつ最悪にマッチしてるせいだと僕は思います）
「…何か失礼な事考えてないかしら？」
「とんでもございませんですとも。えぇ」
『…まぁいいわ。今度シバ（コロス）くから』
「えげつない副音声が聞こえたんですけど？。どっちにしてもヒデェ！」

ったく。と、息を吐き、更に酷な罵声が来るだろうと考え、精神的な柱に耐震リフォームを施す。

「あのですね会長、一つ頼みが…」
『何？』
「いや～、マリアちゃんなんですけど～、ウチに来るのを渋っちゃ

って〜、会長の華麗な説得術でなんとかして頂きたい所存です」
「……」

キリッと勇ましい顔で言葉を切ると、少し腰を落として身構える。
その後ろでマリアは「？」と首を傾げる。

（来るかッ！来いッ！今の俺なら何を言われても――――）
「はぁ。いいわ、言ってあげるからさっさと代わりなさい。貴方はさっさと帰ってこんにゃくで作ったオナ〇ールで喘いでるといいわこの童貞」
「……はぃ」

涙腺決壊。優しい微笑みの輪郭をダバダバダバ…と、溢れかえる涙で濡らした。
そんな顔のまま携帯を差し出されたマリアは、先程までとは違う怯えで恐る恐る携帯を受け取り耳に当てた。

（6）

「さぁ迦具土、ちゃんと説明してもらおうか」

迦具土凍也（かぐつちとうや）は自身の生活の拠点、常盤寮（ときわ）に帰っていた。

そして玄関にて正座。本日二回目。

目の前には巨大なダンボール。おそらく、新城麗羅（しんじょうれいら）が送ったと言っていた『才覚者用セキュリティプログラムセット』だろう。着くの早過ぎだろ！と、ちゃんとつっこんでおいた。

正座している迦具土を、仁王立ちで見下ろすのは、この常盤寮の管理人…の、娘。上下緑のジャージ、亜麻色ポニーテール、整った顔、抜群のプロポーション、巨ぬー、思春期の少年に会わせるのは教育上よろしくないお方。名は楠木咲子（くすのきさきこ）。

常盤寮の管理人夫婦が静養中なので、現在は彼女が管理人をしている（法に触れないかどうかは怪しいが、常盤寮は『常盤寮』という名の『下宿』なので、規模も小さいため彼女1人でもなんとか回せているようだ）。

突如送られてきた大型の機材。迦具土の後ろには桜色の長髪、真紅の瞳を持つ幼女。そしてビニール袋から溢れんばかりの――こんにゃく。

説明しなければ分かってもらえるはずもない。

「あの～…蓮神会の仕事……としか言えないんですけど～…」

「小さな女の子連れて来るのが？」

「ん～……諸事情ありまして…」

「……」

「……」

冷めた目で見下ろす楠木に、汗が吹き出て止まらない迦具土。気まずい沈黙。

「……まぁいい。あんたは嘘をつくようなヤツじゃないしね」

「――――？」

「で？どうすればいいんだい？」

えらく物分りがいいな…と、逆に不信感を覚える程あっさり許されたが、それを言うとなんか話がもつれる気がしたのでやめた。

「あ…。とりあえずこの子をここで預かりたいんです。その機材は俺と『師隈（しぐま）』でなんとかします」

「そーかい。で？…そのこんにゃくは？」

「……研究材料です」

「こんにゃくについて何の研究すんの？」

「……実用性？」

「はぁ？」

「……」

「……」

また沈黙。

男性用ヘルスグッズを作るためだなんて言える訳もなく、当然作る気も無い。

泣きながらスーパーに入り、泣きながらこんにゃくをカゴいっぱい入れて、泣きながらレジに並んで、泣きながら金を払った（約５０００円）。店員の目が痛かった。

スーパーから出て、「ただの変態じゃねぇか！」と、こんにゃくを一つ、べちん！と地面に叩きつけた。通りすがりのおばちゃんに、「食べ物で遊ぶんじゃないよ！」と怒られ、謝った。

普段はクール（？）な迦具土だが、この一連の変態行動を起こす程に、新城の言葉がキツかった。

「いやなんか…無性に食べたくなっちゃって…」
「無性に食べたいで買う量じゃないけど？」
「…当分の間はこんにゃくを主食にしようかと」
「ダイエットか？」
「……そっスね～。最近下っ腹が」
「そーかい。まぁ、がんばんな。だらしなく腹が出てる男は情けないしね」
「……ぅい」

はしたない胸してるあんたに言われたくない。と、言う訳がない。因みに言うと、中肉中背（背高め）な迦具土には、特にダイエットは必要ない。

「……ったく。急に新城のお嬢ちゃんから電話が来たときはびっくりしたよ」
「……ぇ？」
「『迦具土の仕事の関係で、大型な機材と女の子が向かう。仕事に必要な道具と関係者だから、申し訳ないが、追い出したりせず、協力してあげてほしい』ってね」
「……知ってたんスか」

だから物分りがよかったのか。と納得。同時に、あれ？じゃあなんで俺尋問されてんの？。とも思ったがやっぱり言わない。迦具土は基本的に話がもつれるのは苦手な人種である。

「ん～。でも空き部屋が無いからねぇ。その子はあたしの部屋でいいね？」

「あ、はぃ。お願いします」
「じゃあ案内するかね。おいで」

楠木が迦具土の後ろで突っ立っていた少女、マリアに手招きをする。
マリアは特に警戒する様子もなく、てててて、と楠木に寄っていく。

「あぁ、このでっかいの、早めになんとかしとくれよ」
「分かってますよ」

それだけ言うと、楠木とマリアは奥へ進み、管理人室へと入って行った。
迦具土は立ち上がり、田中ジャージのポケットから携帯をとりだす。そしてアドレス帳から電話をかけた。

『……はい？』
「師隈？どうせ居るんだろ？ちょっと頼みがあってさ。下に来てくれ」
『……イヤです』
「会長の激レアな『居眠り』の写真が」
『少々お待ちを』

～～～～～～～～

「なんですかコレは…」

「仕事で使うんだけどさ、俺だけじゃセット出来ねぇんだわ。頼むよ」
「…約束をお忘れにならぬよう」
「わぁってるよ」

常盤寮の玄関にて、人が一人ちょうど収まりそうな大きさの、巨大なダンボールに唖然とするのは、『師隈天嶺（しぐまてんれい）』。寮の一員である。
高校一年生。禊月（はらつき）学園の生徒では無いため、迦具土の直接の後輩ではない。
高校一年生とは言っても、通信制学校なので、寮からは出ない。迦具土が『どうせ』と言ったのはこれが故にだ。
身長低め、やや童顔、所々くすんだ青髪（地毛）、長さは肩程。でっかい黒縁メガネ、目元には常に隈。柄なしの黒Tシャツにベージュのパンツと色気の無い格好に――――白衣。
『何の研究してんの？』と訊かれるが、『いや、アニメかネットゲームですけど』と即答。
自分が堕落している事に何の劣等感も抱かない自宅警備員（ニート）（一応まだ学生だが）である。
初恋の相手は新城麗羅。迦具土の仕事関係で、たまたま常盤寮に訪れていた新城に、すれ違い様に笑顔で挨拶されてフォーリンラブである。
因みに迦具土は新城の居眠り写真など持っていない（というか絶対撮れない）。

「で？どうしろと？」
「いや、お前なら分かると思ってな。――――よッ」
――――キン。と、カッターを探すのが億劫だった迦具土が、ダンボールを氷の剣で切った。

「――――これは…ッ」
「知ってんのか？」

ダンボールから姿を現したのは、規模の小さい鉄塔の様な物だった。

「『ＳＰＳＳ』…ですね」
「え？なに？スペシャルシークレットサービス？」
「特別なＳＳってもはや誰の護衛ですか？」
「じゃあ何なのさ」
「……―ｓｕｐｅｒｎａｔｕｒａｌ（スーパーナチュラル）　ｐｈｅｎｏｍｅｎｏｎ（フィノミナン）　ｓｅｎｓｅ（センス）　ｓｙｓｔｅｍ（システム）です」
「……」
「わかってませんねその顔。そのままですよ。『超常現象感知システム』です」
「……あぁ～」

名前のイントネーションから何となく分かる程度だが、『才覚波を感知するタイプではなく、空間の異常を感知するタイプだ』と言っていた新城の言葉を思い出した。

「まぁ、ＳＰＳ…超常現象感知器（センサー）とも呼ばれますがね」
「……すっげぇどーでもいい…――――んしょ」

とりあえずダンボールから、小さな鉄塔を引きずり出す。見た目の通り重たいが、思った程ではないようだ。カーボンの様な、軽くて頑丈な素材なのだろう。

「しっかし、何に使うんだ？こんなもん。対才覚者用のセキュリティなら、才覚波を感知するタイプの方がよくないか？」

「当然です。でもこれは――

――貴方達専用のセキュリティですよ」

「あ？」

「『才覚者』を超えた存在、『神業（かみわざ）』用のセキュリティです」

「……」

「中央銀行や証券取引所など、政治にとっての重要拠点や、『中央統括行政区』のごく一部のみで使用されている物ですね」

「……へぇ～。ずいぶんといい扱いですこと」

「まぁ当然ですよ。才覚者以上に強大な存在なんですから、扱いも慎重になりますよ」

「……けっ」

「しかし、よくこんな物手に入りましたね。生産されたのは極少数だし、当然市場には出回ってない。買えば億はくだらないって話ですよ」

「億いっちゃうの？　こんなミニ鉄塔が？」

「それだけ高度なプログラムなんでしょうね。億単位のプログラムなんて聞いたこともないですけど」

億を…はした金だと…？と、羨望を通り越して憎悪を感じ始める迦具土。

『お嬢様』という単語がトラウマになりそうだった。

「でも…これだけでは…」

「ん？何かマズイのか？」

顎に手を当て、考える姿勢を取る師隈。

「えぇ。これは名前の通り『感知するだけ』の物です。ＬＡＮやネットを介して他のセキュリティ機器やプログラムに繋げる事で、初めて効果が現れます」

「……じゃあコレがそうか？」

「？」

迦具土が見つけたのは、ミニ鉄塔が入っていた箱の片隅にあった小さな箱だった。その中身は…。

「……」

「……報知器？」

早押しクイズのボタンの様な形をした、白くて丸い物が一つ。

「…どう使えと？」

「……あ、待って下さい」

上下右左様々な角度から見ていた師隈が何かを見つけた。

別になにもしてねぇよ。と、心につぶやく迦具土をよそに、発見報告を始める。

「これはネット接続が可能なタイプの様です」

「……だから？」

「ネット、もしくはＬＡＮを介してコレと接続できるって事ですよ」

ポンポン、と、ミニ鉄塔を叩いてしめす師隈。

「まぁ、この報知器は凍也さんの部屋につけるとして、この鉄塔は屋上にでも置きますか」
「俺の部屋？」
「当たり前じゃないですか。凍也さんの仕事で使う物でしょ？　それなのに、仮に真夜中に鳴ったりして僕達が迷惑被るのは筋違いです」
「ぬぐ…」
「あ、防音もちゃんとしといて下さいね。当然自費で」
「…くぅ」

今日は色んな人から攻められる日だ、と、若干泣けてきた迦具土であった。

～～～～～～～～

物置から電動ドライバーを取り出し、報知器（？）を自室の天井に取り付けた。
その後、ミニ鉄塔を屋上へ持ち上がろうとしたが、扉で突っかかってしまった。
…じゃあ、お願いします。と、師隈は一人屋上へ出てしまい、協力してくれる様子はない。迦具土は仕方なく外から運ぶ羽目になってしまった。
「あ～も～めんどくせ～」
鉄塔を背負った、なんとも間抜けな格好の迦具土は、玄関から出

た後、屋上を見上げていた。
ヒラヒラと手を振る師隈が見えてイラっとした。
「もう絶対に写真などやらん。いや、絶対撮れないけど万が一撮れてもやらん」
ブツブツいいながら、足で地面を蹴りつける。するとそこから、長さの違う『氷の柱』が作られていき、氷の階段が出来た。
無駄が多いので、エネルギーの消費も辛かったが、しょうがない。
空中に氷の足場を作ればいいように思えるが、そんな事は不可能だ。サイコキネシスが使えるならまだしも、迦具土にその力はない。
空中で氷を作る事は可能だが、当然、重力に負けて落下する。
「ん…しょっと」
ゴトン、と、背負って来た鉄塔を置いた。
すると師隈が、自室から持ってきたノートパソコンを鉄塔に繋げ、パソコンにCDを入れた。
「そーいやこれ、電源とかはいらねぇのか？」
「それは大丈夫です。簡単に言えば、全体がソーラーパネルと同じ構造になっていますから」
「晴れてねぇと意味ねぇじゃん」
「心配いりません。『紫外線』を集める物ですから、曇りだろうが雨だろうが、問題無く動くはずですよ」
「ほぉ～…」
元々屋外に置く物みたいですね。と付け加え、師隈はコンピューターの画面に集中する。
画面を覗くと、おびただしい数のアルファベットやら数字やらが

次々と流れていく。
これを見て何を理解しているのか、師隈はカタカタとキーボードを弾く。
分かる訳もない迦具土にとっては、ただ適当に打っているにしか見えない。

「……どの位かかる？」
「思いの外簡単ですね。初期設定位ならあと３０分程あれば」
「…あっそ。じゃ、任せるわ」
「はい」

何をしているのか、訊いても分からない気がした迦具土は、その場は師隈に任せて、寮に入っていく。

（政治の重要拠点で使われるようなプログラムを『思いの外簡単』ね…。流石と言っていいのかどうなのか…）

まぁいいや。で済ませ、多忙な一日を過ごした自分を労うために、自室に戻ることにした。

(7)

「……」

ＳＰＳＳのセットを師隈に任せ、自室で寝ることにした迦具土(かぐつち)だったのだが…。

(……なんで？え？何してんだこいつら)

マンションの一室の様な部屋に入り、バスルームとキッチンを過ぎる。

生活空間となっている部屋の中央には、ガラステーブル、その手前にソファ、右奥にベッド（簡素な部屋に不釣り合いな、最高級セミダブル）、対照の位置にテレビ。

そんな飾り気の無い部屋、正確には迦具土の超お気に入りのベッドに、居るはずのない人間が居た。

(鍵してたよな？…管理人だからマスターキーくらい持ってんだろうけど)

そこに居たのは、先ほど管理人室に入って行ったはずの、亜麻色ポニーテール、上下緑ジャージ、爆乳の常盤寮管理人の楠木(くすのき)と、桜色の髪、真紅の瞳、純白ワンピースの幼女、マリアだった。

「……なんでやねん」

はぁ…。と、肩を落とす迦具土。
部屋には既に絶妙な温度で冷房が入っており、入るなり倒れこもうとしていたベッドでは、既に楠木とマリアが安らかな寝息を立てていた。
楠木がマリアに腕枕をする形で寝ており、マリアは楠木に抱きついていて、胸に顔を埋めていた。
……胸がすっごい形になっている。

（すっげぇな。叩きつけられたスライムみてぇ。てか、あの子苦しくねぇのか？完全に顔埋まってんだけど）

口に出したら鉄拳が飛んでくるであろう程失礼な事を考えながら、一目散にベッドに転がり込むのは諦め、キッチンへ向かう。
冷蔵庫を開けて１．５？ペットの麦茶を取り出す。
迦具土は、お茶は絶対に麦茶派である。

（……腹減ったな…）

今開けたばかりの１．５？の麦茶を一息に飲み干してしまい、そこで、今日は何も口にしていない事を思い出す。
色々とありまくった一日だが、時刻はまだ１６時を少し過ぎた所である。

（…何かあったか？――――――――ｏｈ）

再び冷蔵庫を開ける。普段ストックしているジュース以外は何も無かったので閉じ、下の段、野菜室を開ける。
――――大量のこんにゃくがビニール袋に入ったまま、強引にねじ込まれていた。

（ローカロリー日本代表！！）

バタン！、と、足で乱暴に閉める。

今こんにゃくを見ると、ストレスで発狂しそうな心境な迦具土であった。

（こんにゃく入れに来たのか？だとして、何で俺のベッドに寝るなんてオチになる？）

まあいい、と、ため息をつきながら部屋に入り、ソファに座る。

そしてまた異変に気づく。

（……チョコが……）

ソファの正面、シンプルかつスタイリッシュで、そこそこお気に入りのガラステーブルの上には、大人も子供も大好き・超長年愛され続けて来た『チ〇ルチョコ』が大量に入った大きめの黒い箱がある。

しかし、その箱の周りには、チョコの包み紙が大量に散らばっている。マリアか楠木、もしくは両者が食べ散らかした物と判断した。

（マジかよ……コレ…）

恐る恐る箱を開けると、大量に入っていたはずのいちご〇ルクやきなこ〇ちなどは消え失せており…。

（お前コレ……ビターと…あまりのまずさに1週間で販売中止になった、伝説の『抹茶マヨネーズ　ｉｎ　トロピカルチョコ』しかねぇじゃねえかぁぁ！！……一個減っとるし……珍しいからとっといたのに……）

落胆しつつも、特に好きでもないビターを手に取り、包み紙を開ける。
別に食べる必要は無いように思えるが、今は空腹を満たすというより、エネルギーの補給が目的と言える。
才覚者は能力を使う際、体内のエネルギー、糖や脂肪といった物を大量に消費する。
さらに言えば、才覚者の能力の源である『才覚波』を生産するのは、脳に多大な負荷を掛ける。その負荷から脳を守るためにも、体内の糖などを使わなければならない。
さらにこれらは、消費カロリーに置き換えられ、才覚者は能力を使えば使う程、カロリーを摂取する必要がある。言うまでもなく、体がもたなくなるからだ。
そして、今日の迦具土の消費エネルギーは、カロリーに換算すると、およそ２８００ｋｃａｌ。個人差はあるが、代謝のいい成人男性の一日の自然消費カロリー、もしくは、フルマラソンを休みなく走りきった程の消費カロリーに相当する。
食事も無しにこれだけのエネルギーを消費すれば、エネルギー不足はもちろん、栄養飢餓状態に陥っても不思議はない。
現に迦具土は今、頭を動かすのもしんどい程の虚脱感を覚えているが、特に苦を感じさせないのは、経験上の慣れと言った所か。
そこで、糖や脂肪をバランスよく含み、吸収が早く、少量で高カロリーを摂取出来るチョコレートが重宝するのだ。
いちご〇ルクやきなこ〇ちなどが好きなのは、普通のチョコを食べるのに飽きて、せっかく色んな味があるんだから…と、チャレンジして見事にハマったものである。乙女チックと言われれば言葉も出ない。
「――――ん…」
（ん？）

鼻血が出るんじゃないかと心配される位のビターチョコを食べ、特に何を思う訳でもなくベランダ越しの外の景色を眺めていると、なんとも悩ましい声が聞こえた。

「――あっ……ん…」

「――――――！！！」

迦具土は思わず目を見開いた。

男にとって『夢』とも言える光景だったからだ。

迦具土のお気に入りのベッドで勝手に寝ているマリアと楠木。楠木に抱きつき、その豊満すぎる胸に顔を埋めていたマリアが、感触が気に入ったのか、ぐにぐにと楠木の爆ぬーを揉みしだいている。

揉まれる度に吐息混じりの艶かしい声が発せられ、身をよじる楠木。みるみる顔が紅潮していく。

「ん…はぁ……ぁん」

（何だ？　何だこのミラクル？　寝てんの？　二人とも寝てんの？

――――おっしゃ、もっとやれ！）

願ってもない状況に、男としての本能が剥き出される迦具土。

そんな迦具土の思いが届いたのか…。

「――――――ゃん！」

（ッ！！！！）

ズボッ！と、マリアがジャージの下から勢いよく手を突っ込み、直接母性の象徴に触れる。

その瞬間、今まで聞いたことのない声を上げる楠木。

しかし、流石に直接触れられれば目が覚めるようで…。

「こ、こら！！マリア！！」
「みゅっ？」

状況を察し、勢いよく起き上がる楠木。顔が茹でダコのように真っ赤っ赤。
急に動かれて驚くマリア。どうやらマリアは、驚くと独特な声が出るようだ。

「何思いっきり揉んでんだい！びっくりするじゃないか！――――！ホックが…」

もぞもぞ、とジャージの下から手をいれて、マリアが思いっきり手を突っ込んだ際に外れたであろう、フロントタイプのホックをつけなおす。
胸と違い無駄な肉のついていない、綺麗なラインのくびれ、及び下乳があらわになってしまっているが、迦具土が部屋に居る事に気づいていないのだろうか。

「ふぇぇ…」
「え？え？何で？何泣いてんだい？」
「…おねーちゃん怒った～」
「え？あ、あぁ…ビックリさせたね。ゴメンよ、あたしがビックリしただけだから、怒っちゃいないからさ」

今にも泣き出しそうな顔になるマリア。それを見て慌ててあやす楠木。未だに迦具土と目が合わない。

「……えへへ～」

楠木に頭を撫でられ、ふにゃ…と、心地よさそうな笑顔をこぼす。
「〜〜〜〜〜ッ！なんて可愛いんだろーねぇこの子はぁぁ！」
すりすりすりすりすり……。と、マリアを抱き寄せ、頬をすりつける。当のマリアは嫌がる様子はなく、嬉しそうにキャッキャとはしゃいでいる。

（何であんなに懐いてんだ？それにあの子、あんなキャラじゃねぇだろ）
「――――ん？」
「あ……」
「……」
「……」

待ちに待った（？）ご対面。
夕飯のメニューくらい考えられそうな沈黙の後…。

「なんでここに居るんだい！」
「――――俺の部屋！！」
「ぐぅ……見たのかい？」
「……何をですか？胸を揉みしだかれてる所ですか？ホックつけ直してる所ですか？その子に「おねーちゃん」などと呼ばせてる事ですか？」
「キャーーーー！！！！！」
「ぶっ？」

ボスッ！と、枕を投げつけられる。
あまりの速度に、とてつもなく柔らかい枕だが、ちょっと痛かった。

顔面に枕を置いたまま、ソファに倒れ込んでいたら、「バカーー！！」と言う声と、部屋から走り去って行く音が聞こえる。

（…他人の部屋のベッドで勝手に寝てるからでしょーが。……言い過ぎたか？）

顔の上に乗っかったままの枕を持ち直し、頭の下にやり、そのままソファで寝てしまおうとする。

「……何？」

目の前に、さっきまで楠木とイチャついていたマリアが居た。正確にはマリアの顔があった。

ソファの背面側から、迦具土の顔を覗き込んでいる。

「――――大丈夫？――――おにいちゃん？」

「……」

迦具土はポケットから携帯を取り出し、ウィキ〇ディアのアプリを起動する。

『兄――――本人から見て傍系２親等の年長の男性、通常は同じ父母から生まれた年長の男性をいう。また自分の姉と結婚した男性、すなわち姉婿や配偶者の兄も本人から見たら兄になる。その場合、義兄と書いて「あに」と呼ぶ場合が多く、対象者より年上であるとは限らない。また、親の養子や親の再婚相手の連れ子が年上だった場合も義兄にあたる。』

「――――よし」

携帯を閉じ、枕を整え、目を閉じる。

「「よし」って何が？ねぇ何が？ねぇねぇおにいちゃん。ねぇってばおにいちゃん。お～に～い～ちゃ～ん～」

聖母ならぬ幼女マリアは、迦具土の肩を揺さぶったり、頭をぺちぺちと叩く。

「お・に・い・ちゃ・ん！。おに～い～ちゃ～～ん～。おに――」

「やッッかましゃぁぁぁぁい！！！」

「みゅっ！！」

耐えかねた迦具土が激昂する。

マリアは裏返ったような独特な声で驚き、ソファの後ろでうずくまってしまう。

「疲れてんだよ！静かに寝させてくれ！」

「……」

「――ったく」

ぼすっ。と、再びソファに倒れ込む。

またしても言い過ぎたかとも思ったが、正直、疲れたのでどうでもよかった。

「――ふぇぇ…」

「ッ！」

「…ふ…えぇ……ぅえ…」

（あ～めんどくせぇ～。この幼女めんどくせぇ～）

楠木に怒られた時同様、泣き出してしまうマリア。

迦具土にとってはめんどくささＭＡＸだが、自分が泣かせてしまった事は事実なので、とりあえずは泣き止ませたい。
ソファから立ち上がり、マリアの前へ行き、屈んで目線を合わせる。
泣いてる子供など相手にすることが無いので、正直どうしたらいいのかわからない。
とりあえず、先ほど楠木がやっていた様にするべきかと結論をまとめる。

「あぅ」

幼い嗚咽を漏らしていたマリアの頭に手を置く。
よくわからない程小さな声がしたが、聞こえなかった事にした。

「……」
「あ～…悪かった。言い過ぎたよ。ゴメンな」
「……」
（――だめか…？）
「……えへへ～」
「――ッ」

潤んだ瞳で、くちゃっとなった顔から、ぱぁっ、と晴れやかな笑顔になる。
迦具土は『ロリコン』と呼ばれる類の人間ではないが、不覚にも顔が熱くなる思いをした。

「……とりあえず『おにいちゃん』だけはやめてくれないか？」
「なんで？」
「いや…、俺は『そういう』人間じゃないからさ……嫌ではないけど、あんまりいい思いじゃない」

「『そういう』？　じゃあなんて呼べばいいの？」
「……迦具土でも凍也でもツッチーでも、『おにいちゃん』以外なら何でもいい」
「ん。わかったよ、トーヤ？」
「……ハートもいらん」
「む～。注文が多いよ、トーヤ」
「へいへい」

むくれっ面のマリアの頭を、くしゃくしゃ、と若干雑に撫で、立ち上がる。
再びソファに倒れ込もうかと思ったが、せっかく立ち上がったので、枕を掴みベッドに向かう。

「というかマリア、会った時とキャラ違うんだけど？」
「ふぇ？」

会った時の様に『きみ』と呼ぶか、柴崎や鴻薙の様に『お前』と呼ぶか迷ってしまい、名前で呼ぶ。
だが、マリアは特に気にする様子もなく、迦具土の質問に答える。

「キャラ？」
「性格っつうか…態度っつうか……そーゆーヤツだよ」
「あ～。それはね～、『れいら』っていうおねーちゃんと、咲子おねーちゃんがね、『気を遣わなくていい』って言ってくれたんだよ」
「……なるほど。確かにまぁ、そぉなんだが」

気を遣うか遣わないかで、キャラの使い分けが出来るのか、迦具土には疑問だったが、特に掘り下げようとは思わなかった。

（確か『姫』とか呼ばれてたな…。それが本当だとするなら、『王

族の立ち振る舞い』的な事で、対人マナーが身についてんのか？
だとしたらこの幼女、俺より『大人』なのか？）

しばらくマリアの顔を凝視し、ないない、と頭を横に振る。
当然、マリアにはその意味はわからず、『？』と首を傾げている。

「あ、あと、会長…れいらって人には何て言われたんだ？」
「……んとねぇ…」
「？」
「あのね。れいらっておねーちゃんがね、『そこにいる、冴えない顔した童貞野郎が、私が何を言ったかって訊いてきたら、金〇ま踏み潰すって言っておいてね？』って言ってた」
「……」
「ねぇねぇ、『どーてー』って何？『金た〇』って何？」
「……いずれ分かる」
「？」

どこに居ても自分の心を的確にへし折ってくる新城に、半ば感心しつつもうなだれる。
立ち直りが早いというか、あまり気に留めなくなったのは、もはや『慣れ』でしかない。

（……おかしい）

ふと思う。
蓮神会の仕事を通し、新城に接する事の多い迦具土だが、思い返せば、今日の新城はおかしな点がいくつかあった。

（あの超絶残念系暴君撫子が、いくらかわいいもの（美少女ならなおさら）が好きって言っても、今日会ったばかりの女の子に、『億』

なんて金使えんのか？。そもそも、なぜ俺に『保護』させる？。対象者を付け狙うのが才覚者なら、『ＡＡＡ（トライエース）』に預ける手もあるはず。今までだってそうだったじゃねぇか）

『ＡＡＡ（トライエース）』とは、『Ａｎｔｉ（アンチ）　Ａｂｉｌｉｔｙ（アビリティ）　Ａｇｅｎｔ（エージェント）』の略称で、才覚者専門の警察組織である。

これまで、蓮神会の仕事で保護、若しくは拘束した人物が、『才覚者、若しくは才覚者と深い関わりがある者』だった場合、このＡＡＡに身柄を引き渡し、その後の処遇を任せていた。

（何か隠してやがるな…。俺に隠す様な事があるのか？この子について何を知っている？）

迦具土は普段から新城にこき使われる。
雑用から重要度の高い仕事まで様々だ。
これは、新城が迦具土の人格や実力を信用しての事（少々やり過ぎではある）なのは違いなく、迦具土も自慢ではないが、隠し事をされる様な仲ではないと思っている。

（まぁ…あの人の考えてる事がわかんねぇのはいつもの事だし、問いただすなんて出来る訳もねぇしな）

「トーヤ～」

１人黙り込んで考えてる迦具土に、痺れを切らした幼女マリアが、子どもらしさ全開の甘え声で顔を覗き込む。

「ん？」
「さっきから何考えてるの？」
「……何でもねぇよ」
「むぅ…」

「あ～、わかったわかった。でも俺もう疲れちまったからさ、ちょっと寝てぇんだ。咲子ねーちゃんに遊んでもらいな」

適当にはぐらかされて、むくれっ面になっているマリアの頭を撫でてなだめる。

はぁい。と返事をし、マリアは部屋を出て行く。

素直な子じゃないか。と少し感心した。

今の楠木が、幼女と戯れられる様な精神状態かは、誰も知る由も無い。

「……めんどくせぇなぁ、これから」

ぼすっ。と、高級ベッドに倒れこみ、迦具土は瞳を閉じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4717x/

神理郷 〜God Pia〜

2011年12月16日01時47分発行